

日本生理学会大会の英語化に関するアンケートの結果報告

平成 18 年 4 月 26 日

平 16-17 年度 日本生理学会 学術・研究委員会 (委員長 久保 義弘 (文責))

平 18-19 年度 日本生理学会 学術・研究委員会委員長 白尾 智明

1. 序文

平成 18 年 3 月、生理学会大会の英語化に関するアンケートを、メーリングリストで連絡しメールにて回答を求める方法と、群馬大会時に受付にて回答用紙を配布し会期中に回収する方法を併用して、実施した。ここにその集計結果を報告する。なお、アンケートの全体は、生理学会 HP <http://physiology.jp/exec/page/page20060313164615/> に残してあるのでご参照いただきたい。ここでは、以下に、その趣旨説明の部分のみを紹介する。

日本生理学会・学術研究委員会では、これまでに、生理学会大会の英語化とその具体的なスケジュールを提言してきました。2009 年の京都で行われる国際生理学会 (IUPS2009) へ向けて、またその目的のみにとどまらず、広く海外からの参加者を受け入れることのできる態勢をつくり、生理学会大会の国際化・高度学術化を進めていくためです。そのアウトラインに従い、福岡大会、札幌大会、仙台大会、群馬大会において、各大会長をはじめとする先生方のご尽力により、導入が進められてきました。

これまでに進めてきた主な変更点は、以下の 5 点です。

1. 和文抄録を廃止し、事前配布の英文抄録に一本化。
ただし、演題、氏名、所属の英文、和文併記のプログラム集を、別途配布。
2. ポスターの記述を英語化。
ただし、演題名、氏名、所属は、英文・和文併記。
3. 特別講演、シンポジウムの発表を英語化。ただし、質疑応答は日本語可。また、一部の教育講演、生理学教育・動物倫理等のシンポジウムは例外とする。
4. 一般演題のうち、発表者が英語での口演を諾とするものの中から、プログラム委員会が選抜して、英語での一般口演のセッションを実施。ただし、質疑応答は日本語可。
5. 英語一般口演のセッションには、外国人の発表演題も公募して、一部にトラベルアワードを支給。

今回、学術研究委員会では、これまでの大会英語化に対する皆様のご意見をお伺いして、今後の方向を考えるために、アンケートを行うことにしました。IUPS2009 を控え、大きな後戻りはしない方針ですが、問題があれば、それを浮き彫りにして、後戻りすることなく解決するにはどうすればよいかを考える所存です。

この報告書は、3つの部分から構成される。第1は回答者自身について、第2は各質問項目についての5段階評価による回答について、第3は各質問項目についての自由意見についてである。回答総数は102通と、全会員数、および大会参加者数からすると、絶対数としてはやや物足りないものではあるが、回答者の属性、意見とも、十分な多様性を含んでおり、ごく一部の限られた方の意見というわけではないと考えられた。

2. 回答者自身について

回答者自身についての質問は、回答者が、生理学会会員もしくは大会参加者の全体を偏りなく反映しているものであるかどうかを探るために行った。

(1) 図1は、所属についての質問10に対する回答をまとめたものである。

医学科生理学教室が37%、医学科全体で、48%という結果であった。医学科に属する会員が全体の41%という会員委員会のデータがあるので、回答者は、やや医学科所属者の割合が高いが、概ね全体を反映しているものと考えられた。なお、この設問において、体育学部、生活環境学部が抜けている点をご指摘いただいた。失礼をお詫びしたい。

(2) 図2は、年齢についての質問11に対する回答をまとめたものである。

40代、50代の回答者の割合が高く、20代、30代の回答者の割合が、全会員における割合に比して、かなり少ない印象がある。現在ではなく、今後の生理学会を担う方々からの回答が少なかった点は残念であった。

(3) 図3は、役職等についての質問12に対する回答をまとめたものである。

教授が33%であった。この割合は、会員全体における教授の割合よりも明らかに高い印象がある。教授のみならず、教室スタッフの回答者の割合が全般に高いのに対し、大学院生の回答者は7%、ポスドクの回答者は1%という非常に低い値に留まった。(2)にも関係するが、学会や大会の運営に自分の意見を反映させようという意識が、若い会員にはあまり強くないことが低い回答率の原因かもしれない。なお、この設問において、講師という分類が抜けている点を多数ご指摘いただいた。アンケート作成時の単純なミスと校正時の見落としによるもので、失礼を心よりお詫びしたい。

(4) 図4は、留学経験等についての質問13に対する回答をまとめたものである。

長期留学経験者の割合が51%と、思いの外高い印象がある。会員全体についてのデータがあるわけではないので結論はできないが、長期留学経験者のこのアンケートに対する積極性を反映している、もしくは、(3)で大学院生・ポスドクの割合が低く、ス

タッフの回答者の割合が高いことにひきずられているのではないかと推測される。

3. 各質問項目についての5段階評価による回答について

質問項目 1, 2, 3, 4, 5 について、以下、順に記す。各項目とも、まず、全回答における各スコアの割合を示し、その後、回答者の属性に従って、分割して集計した結果を示す。分割は、さまざまな線引きが考えられるが、以下のような3種類の2分割を行った。(A) まず、英語化に対する意見に大きな影響を与えることが予想される、長期留学経験のあるものと、それ以外のものに分けた。(B) また、生理学教育等において重要な役割を果たしているが、同時に生理学会の権威的かつ排他的な旧体質という批判もある医学科生理学と、それ以外のものに分けた。(C) さらに、役職において、ほぼ半数を占める教授・助教授(シニア)と、それ以外に分けて集計した。この2分割は、いずれにおいても、両グループに十分な回答数がある。院生と非院生、研究所と非研究所等、コメディカルとそれ以外等、他の分割法も多々考えられるが、グループによって回答数がかなり小さくなってしまうため、ここでは行わなかった。これらの2分割のうち、下記のように、(A)、(C)では、質問によっては明確な差が見られたが、それに比して、(B)では、総じて両グループの差は小さかった。医学科生理所属の方が、他に比べて特に意見が大きく異なることはないようである。

- (1) **図 5 は、変更点 1 「和文抄録を廃止し、事前配布の英文抄録に一本化。ただし、演題、氏名、所属の英文、和文併記のプログラム集を、別途配布。」 についての質問 1 に対する回答をまとめたものである。**

この項目については、肯定的意見 (5, 4) が 60 % を超えており、中間的意見を加えると 75 % と、広く支持されている。2 分割データを見ると、長期留学経験グループで肯定的意見が多いが、それ以外の 5 グループにおいても、肯定的意見 (5, 4) が、50 % - 65 % と広く支持されていることがわかる。なお、非常に否定的意見 (1) が、10 % 程度あるが、これについては、明確な理由がある。この点については、4. の自由意見の分析の項で記す。

- (2) **図 6 は、変更点 2 「ポスターの記述を英語化。ただし、演題、氏名、所属は、英文・和文併記。」 についての質問 2 に対する回答をまとめたものである。**

この項目については、肯定的意見 (5, 4) が 59 % で、中間的意見を加えると 80 % を超えており、広く支持されている。2 分割データを見ると、「教授・助教授、以外」のグループで肯定的意見 (5, 4) の割合が 45 % と最も低いが、それでも中間的意見を含めると、73 % に達している。

- (3) **図 7 は、変更点 3 「特別講演、シンポジウムの発表を英語化。ただし、質疑応答は日本語可。また、一部の教育講演、生理学教育・動物倫理等のシンポジウムは例外と**

する。」についての質問 3 に対する回答をまとめたものである。

この項目については、肯定的意見 (5, 4) が 45 % で、中間的意見を加えると 60 % を超えており、一応の支持を得ているものと言える。しかし、非常に否定的意見 (1) が、15 % あり、質問 1,2 で肯定的な意見が強かった長期留学経験ありのグループにおいても 13 % あった点、教授・助教授以外のグループにおいては、20 % を超えている点が目立っている。本アンケート中で、最も多い、否定的意見が寄せられた。自由意見を踏まえた考察を以下で行う。

- (4) 図 8 は、変更点 4 「一般演題のうち、発表者が英語での口演を諾とするものの中から、プログラム委員会が選抜して、英語での一般口演のセッションを実施。ただし、質疑応答は日本語可。」についての質問 4 に対する回答をまとめたものである。

この項目については、肯定的意見 (5, 4) が 42 % で、中間的意見を加えると 60 % を超えており、一応の支持を得ているものと言える。しかし、質問 1, 2 に対する回答よりは、質問 3 に対する回答のパターンに近く、否定的な意見も多く寄せられた。また、長期留学経験ありのグループにおいて経験無しのグループよりも、強い否定的意見 (1) の割合が高く、13 % あった点も注目される。自由意見の項で、この点を考察する。

- (5) 図 9 は、変更点 5 「英語での一般口演のセッションには、外国人の発表演題も公募して、その一部にトラベルアワードを支給。」についての質問 5 に対する回答をまとめたものである。

この項目についての特徴は強い否定的意見の割合が総じて非常に低いことである。また、強い肯定的意見 (5) の割合も高いが、(4) がやや低く、中間的意見 (3) が多いことも特徴である。全体としては、広く支持されているといえる。

4. 各質問項目についての自由意見について

この部分が、本報告の最も重要な部分である。問題点を具体的に浮き彫りにして、どのような対処を行うかを決定することが目的だからである。回答者の多くの方から、より英語化を徹底させるべきだという意見から、すべて日本語に戻すべきだという意見まで、非常に多種多様な意見が寄せられた。あまりに多様で総括してしまうことは原型をゆがめしまう恐れがあり、また非常に困難なので、ここでは、肯定的意見、種々の問題点の指摘の代表的なものを紹介し、考察を行う。各意見の末尾の数字は、回答者に付した通し番号である。

なお、この文書の末尾に、追加資料として、すべての自由意見を割愛することなく掲載しておくので参照していただきたい。

- (1) 変更点 1 「和文抄録を廃止し、事前配布の英文抄録に一本化。ただし、演題、氏名、

所属の英文、和文併記のプログラム集を、別途配布。」 についての意見

(A) 肯定的意見

- ・抄録に関しては英文表記は避けられなくなっていると思う。演題一覧のプログラム集は学会時に大変役立つ。(73)
- ・参加者のほとんどが日本人という現況を鑑みても、演題・氏名・所属の和文併記は利便のために必要と思われる。(3)
- ・研究の国際公用語はやはり英語なので英語抄録のみでよいと思う。(9)
- ・当番幹事の手間が掛かりすぎる。英文抄録のみで可。(10)
- ・短い和文は意味がなかった。改善されたと思う。(13)
- ・英文・和文併記のプログラム集の別途配付は、是非、続けてほしい。(15)

(B) 種々の問題点の指摘

- ・意味がない。すべて和文に戻すべきである。(56)
- ・分野が広すぎるため、自分の分野以外の演題は日本語で書かれていても理解が難しいのに、英語だと尚更である。(47)
- ・少なくとも英文抄録は学会場に持ってゆかない(重い、かさばるから)、英文抄録の内容と実際の発表の内容の齟齬は問題にならないのか？その点を考えると昔の「和文抄録あり、事後英文抄録の配布。」の方が実際に近い。極端なことを言えば発表登録すれば、発表しなくても学会発表したことになる。(31)
- ・英文抄録は、事前には会員にしか配布されませんでした。非会員の参加者には、参加費に予め上乗せする形で抄録代を徴収し、会員同様に配布していただきたいです。また、プログラム集と英文抄録集の順番がバラバラなために対応付けに苦労しました。せめて、プログラム集に抄録集のページ番号を載せるとか、抄録集にだけある「P006」などの通し番号をプログラム集にもつけて欲しかったです。(38)
- ・「英文抄録に一本化」には賛成で何の問題も無いと思います。しかし、現行では、「事前配布に一本化」になっていて、“非会員で当日参加すると、抄録を受け取ることが出来ない”、また、“販売もしていない”、という現行のシステムは最悪です。現に、今大会で製薬企業から参加した非会員の方から、「このようなシステムをとっている学会には2度と参加しない。」と言われました。大会への参加者を増加させるためにも、当日参加者が抄録を受け取れる様にすべきと考えます。(42)

(C) まとめ

3. のスコア集計においても見られたように、概ね肯定的な意見が多い。「英文抄録は時代の流れ、和英併記のプログラム集は便利なので是非とも必要。」というのが、平均的な認識のように思われる。ただ、具体的な問題点として (1) 非会員が当日参加した場合、英文抄録を入手することができない点、(2) 英文抄録と和英文プログラムの演題番号の対応が付けにくい点、(3) 早い時点での英文抄録と実際の発表内容に差異があってもよいのかという点が指摘された。特に (1) については、早急に対応が必要であると考えます。

(2) 変更点 2 「ポスターの記述を英語化。ただし、演題、氏名、所属は、英文・和文併記。」

についての意見

(A) 肯定的意見

- ・ oral presentation とは違い、英語の読み書きは慣れていると思われるので、ポスターの記載は英語でよいと思います。質疑応答は日本語可は仕方ないでしょう。(2)
- ・ 国際交流のために必要であろう。(25)
- ・ 英語化の一環として適切である。(43)
- ・ 海外からの参加者が喜んでいて。(83)
- ・ ポスター発表者が説明してくれれば、問題はない。(100)
- ・ 他の発表でも使えるので英語表記でのほうが発表者の負担も少なくよいと思う。(9)

(B) 種々の問題点の指摘

- ・ 本文も英文・和文を併記すべき。他人の発表は全くわからない。(47)
- ・ 要約の和文もあった方がよい。(14)
- ・ 「ポスターの記述を英語化」することには異論はないが、そうであれば「演題、氏名、所属は、英文・和文併記」することは無意味。ポスター本文の英語が読める人は演題の英語も読めるのではないか。(7)
- ・ 出来れば和文の抄録(英語抄録の和訳)も並記した方がよいと思う。(29)
- ・ あまり関係しない分野のポスターをざっと見ていくために、Introduction と Summary にも和文がついている方がありがたい。(61)
- ・ サマリーは必ず英文と和文を共に掲示する。(75)
- ・ 日本語の抄録を廃止するのだから、発表の際に日本語の summary をつける様にしたらどうか。(42)

(C) まとめ

これも、3. のスコア集計に見られたように、概ね肯定的な意見が多い。英語で表記されていれば、外国人参加者も無理なく読むことができ、日本人参加者も、日本語での説明を受ければ特に困難はない。というのが、多数意見と思われる。ただし、日本人参加者が多くのポスターをブラウズするために、題名、氏名等に加えて、ポスターにおける要旨の和英併記を求める意見が多数あった。この点は、検討する必要があると考えられる。

(3) 変更点 3 「特別講演、シンポジウムの発表を英語化。ただし、質疑応答は日本語可。また、一部の教育講演、生理学教育・動物倫理等のシンポジウムは例外とする。」についての意見

(A) 肯定的意見

- ・ 基本は英語であって良いと思いますが、質疑応答については確かに日本語可能な条件を残してもらえると良いと思います。質問者によっては英語により趣旨がうまく伝わらない場合も考えられますので。(1)
- ・ 発表言語の英語化は、IUPS の開催のためのみならず、国際的な関わりを深くしていくために、特に我々若い発表者にとっては、よい経験になると考えられる。反面、質疑応答が日本語可能であることが、一部のシンポジウムや発表などに浸透しておらず、却って英語を用いることが議論の妨げになっている感は否めない。このことは、参加した外国人(英語の native speaker)の目から見ても顕著な状況のようである。(23)

- ・ 生理学会大会の国際化へのステップとして適切な選択である。質疑応答で日本語を許すというのは、英語化による「コミュニケーション不足」という問題点を回避するための現実的解決法として、有意義である。(43)

(B) 種々の問題点の指摘

- ・ 発表が英語であれば、質疑応答も英語があたりまえ。特に、日本語を理解できない海外からの参加者がその会場にいる場合、日本語で質疑応答したらまったく意味がない。(42)
- ・ これまでも、presentation は日本人であっても英語でそこそこできていた。問題は、discussion である。IUSP の準備、今後の国際化を計るならば、むしろ discussionこそ、英語で行うべきだ。(83)
- ・ 発表を英語化なら、質疑応答も英語にすればよいと思う。英語の発表で理解できない人は日本語であれ、英語であれ質問できないと思うので、どうせやるなら統一すればよいと思う。(92)
- ・ 質疑応答は原則「日本語」。「英語でも可」としてもよいのでは。(15)
- ・ 外国人の発表者であれば当然英語であろうが、日本人のみ参加のセッションで、日本人同士が英語で対応しているのは変である。(66)
- ・ 専門外でも興味ある分野について、英語での発表は理解が難しい。(57)
- ・ 学会の国際化の点から考えると大事なことはあるが、若手(新規)の学会員を増やす点からはマイナスかもしれない。(73)
- ・ 生理学会はコメディカル領域の人たちの参加を期待している側面もあり、また自分の専門領域以外の領域に付いて学ぶということもあるので、教育講演、特別講演は全面的に日本語とすべき。また、英語化したシンポジウムのスライドには、1 行程度の日本語サマリー(字幕)をいれることを演者に要望すること。このサマリーは大いに役立つと思われる。すでにそうしている人があって、自分の専門領域外の話も良く理解できたので、有効だと思われる。(5)
- ・ 学会の活性化に逆行する。特にシンポジウムは他分野の研究概要を理解する絶好の機会と考えられます。これでは学会に参加する魅力が失われてしまう。(6)
- ・ 学会の意義の一つは、自分の専門外の仕事を知って、仕事のヒントにすることがあると考えます。これを broken English でやられると、ついていけません。パワーポイントの図表はポスター同様、すべて英文とし、簡単な figure legend をつけることを義務づければ、口演自体は日本語でも可とすべきと考えます。将来、外国人も役員になる可能性を見越し、来年度から役員会の討議をすべて英語でされますか？(29)

(C) まとめ

かなり、多様な、明確に相反する意見が出されている。一方で、discussion も、すべて英語にするべきだという意見があり、また逆に、他分野の概要をスムーズに理解するために日本語発表にしてほしいという意見、日本人同士が英語で discussion しているのは変だという意見があった。3. のスコア集計でみられた 15% に達する強い否定的意見は、特別講演、教育講演、シンポジウムは他分野の理解のよい機会であるのに、英語が理解の障害になっているということを反映していると考えられる。

全体としては、英語での講演はよいが、十分な discussion を行うために、日本語の discussion を許容するべきだという見解が多かった。discussion は日本語でかまわな

いという点が、充分伝達されていなかった会場もあるようなので、今後、この点をより明確に周知することが必要だと考えられる。また、英語発表の場合、理解を助けるために、スライドに和文のサマリーを一文入れるようにしてはどうかという意見もあった。検討に値すると考えられる。

(4) 変更点 4 「一般演題のうち、発表者が英語での口演を諾とするものの中から、プログラム委員会が選抜して、英語での一般口演のセッションを実施。ただし、質疑応答は日本語可。」についての意見

(A) 肯定的意見

- ・ 一般口演は全て英語発表にして良いと思います。大学院生や留学前の研究者にとっても英語発表や英語での質疑応答をトレーニングする良い機会だと思います。このような機会があることにより、普段から心構えが変わってくるのではないのでしょうか。(40)
- ・ シンポジウムをオーガナイズできないが、口演で発表したいという若手研究者は多数いると思われる。事実、本大会でもこれを希望する研究者が多数あった。これらの若手が英語で発表する機会をもつことは、生理学学会大会、生理学会会員の国際化に貢献すると思われる。今回の招待講演者の一人である、Dr. Roger A. Nicoll もこれを、「若手研究者の国際化へのステップ」として高く評価していた。質疑応答で日本語を許すというのは、英語化による「コミュニケーション不足」という問題点を回避するための現実的解決法として意味がある。(43)
- ・ 口頭発表において、十分な英語力を皆がもっているとは考えにくいです。条件付や発表者本人の了承において英語口頭発表セッションを設けることには賛成です。(1)
- ・ 多くの人が英語での発表の体験(訓練)ができたと思う。その趣旨に沿って今後も続けた方が良い。ただ、今回はポスター発表と重なっていたのでこまった。(34)
- ・ ポスターが選択できるので、これでよいのではないか。(69)

(B) 種々の問題点の指摘

- ・ 質疑応答も原則英語にするのがよい。(84)
- ・ 全演題を英語にすべきと思います。質疑応答も原則すべて英語が良いと思います。もし、演者と質問者の意志疎通がはかれない場合は、座長が責任をもって、通訳(日本語と英語)等の措置をとれば良いと思います。座長がしっかりとすべきだと思います。今回の前橋の生理学学会大会でも会場からの質問が無いにもかかわらず、最初から最後まで全く質問しない情けない座長もいました。(41)
- ・ この場合もスライドには、1 行程度の日本語サマリー(字幕)を入れることを演者に要望してはどうか。(5)
- ・ 外国人の参加するセッションについては英語口演は当然のことと考えますが、日本人のみのセッションでは支障を生ずることもあり、日本語での口演が望ましいと考えます。(8)
- ・ 質問3と同じ理由。すなわち、学会の意義の一つは、自分の専門外の仕事を知って、仕事のヒントにすることがあると考えます。これを broken English でやられると、ついていけません。パワーポイントの図表はポスター同様、すべて英文とし、簡単な figure legend をつけることを義務づければ、口演自体は日本語でも可とすべきと考えます。一般口演はシンポジウムよりいっそう専門的な話題となるので、よけいに専門外の人参加を拒んでいる結果となっているように思われます。(29)

- ・ これについても発表者に事前に良く周知しておけば問題ありません。群馬大会の場合、文書的な通知がどこにもないままに、「原則は英語」とHPに記載されているだけです。初めて、あるいは久しぶりにこの学会で発表する者には、非常に唐突な印象を与える。前の質問同様、現時点では圧倒的に日本人が多い上に、準備に手間がかかるので、それほど意味があるとは思えません。つまり、このことにより学会が活性化したり、国際化するとは思えません。(20)
- ・ 英語のセッションだけでなく日本語が認められるセッションがあっても良いと思う。特に理論より技術的なものは、技師、技官、技術補助員など日本語のほうが理解がより深く出来ると思うので。(66)

(C) まとめ

この点についても、質疑応答まで英語化という意見から、口演自体を日本語でという意見まで、さまざまな意見が寄せられた。おおまかには、群馬大会での方針は支持されているようである。平均的な意識を探ると、英語での一般発表は大変だったが、やっただけの意義はある。英語での口演を希望しない発表者はポスター発表を選択することができるのであれば不都合はない、というのが全般的な印象である。

(5) 変更点 5 「英語での一般口演のセッションには、外国人の発表演題も公募して、その一部にトラベルアワードを支給。」についての意見

(A) 肯定的意見

- ・ 国外からの参加者が増えることは望ましい。折角海外から参加してきた人々が十分に質疑応答に参加できるよう、また、不便な思いをすることの無いよう、今後も主催者側の努力をお願いしたい。(40)
- ・ 是非、継続・更なる拡充を希望します。演者紹介時に、座長が受賞口演である旨をはっきり聴衆に告げる(もしくはスライドで表示する)ことを義務づけると良いと思います。(32)
- ・ 生理学会大会の停滞状況を打開するために、アジア地区を中心とした外国の研究者の大会への参加を本格的に検討すべき時期に来ている。今回の試みはその意味でも貴重であった。また、英語化の意味を実質化するためにも、今後も継続し、できれば規模を拡大すべきである。(43)
- ・ 外国人の学会参加を促すためには必要と思う。(73)

(B) 種々の問題点の指摘

- ・ 外国人研究者の参加を金銭面でサポートすると、実質的には、発展途上国の恵まれない研究者の援助の色彩が強くなるのではないのでしょうか？むしろ、数は少なくとも、外国からの優れた研究者の招待講演を企画する方が、魅力的だし、参加者も多くなるのではないのでしょうか。(2)
- ・ 海外から進んで日本まで発表しにやってくる外国人研究者はあまりいないように思われる。また、トラベルアワードを支給しても、参加人数の点からあまりコンピティティブにならず質の高い研究の発表も聞けないと思う。海外に出ている若手日本人研究者に自分たちの仕事を日本で発表させる機会を与えることもトラベルアワードの意義に拡大するなら、応募数も多くなり、人材育成の点からも大きな意義があると思う。(3)
- ・ 英語の口演にトラベルアワードを出すならば、日本語での一般口演参加者にもトラベルアワードを出すようにすべき。特に大会開催時期が通常の3月末だと、航空券の割引等が使えないことが多く、日本からの参加者にも多額の出費が伴うことがある。(42)

- ・ その一部というのをどういう基準にするか？またトラベルアワードは国内の若手の参加者も望んでいると思うがなぜ外国人の発表演題のみのそういう制度を設けるのか？(13)
- ・ その必要はない。外国人に対して優遇措置を執る必要性などないと思います。(20)
- ・ 現時点での中国人等の発表内容の質が、JPS に通らないようなものが多く、トラベルアワードを支給してまでの意義を感じないが、今後このレベルで推移するかどうかは不明。過去3年間に JPS に掲載された(当然 in press を含む)論文の著者であることをトラベルアワード支給の条件にする等の改善方法が望まれます。(29)
- ・ 今回発表した外国人のレベルが低かったのは問題であった。(84)
- ・ 九州・沖縄や北海道などの遠隔地からの『優秀な若手』研究者への国内発表への一部補助についても考慮されては如何ですか？(15)

(C) まとめ

スコア集計では、非常に否定的な意見は少なく、広く肯定的に受け止められている印象であった。しかし、自由意見では、さまざまな意見が記されていた。海外からの参加を促すという意義を高く評価し、今後の拡充を求める意見がある一方で、外国人だけを特別扱いするのは変で日本人にも与えられるべきだ、その資金を用いて優れた招待講演をさらに充実させるべきだ、学術レベルが低いのが問題だ、といった意見が見られた。スコア集計にみられるように全体としては前進するべきだと考えられるが、指摘された点は検討に値する。

(6) 質問 6 「大会英語化に伴うデメリットとして、発表内容の理解や意志の疎通が不十分になってしまう可能性のあることがあげられます。これ以外に、どのようなデメリットがあるのでしょうか？(例：結果として、門戸がせばめられ、参加者数が減少する。)」についての意見

(A) 特に危惧する点はない、もしくはやむを得ないという意見

- ・ 質疑応答はシンポジウムを含め全て日本語可とすることで特にデメリットはないのでは。(14)
- ・ 英語使用は推進せざるをえない。将来は生理学会の東アジア各国との共催も考えるべきか。あるいは、薬理学会との共催にして日本のみ開催を維持する道を選ぶか？(17)
- ・ 現時点ではそのようなデメリットが考えられます。しかし、若者たちの英語や外国人に対するコンプレックスがなくなりつつあるので、英語化そのものは推進しても良いと思います。しかし、それと国際化や学会の活性化は別の問題である。外国人や留学生に対する考え方を変えない限り、何も変わりません。(20)
- ・ 英語がそんなに大きな障壁になる研究者は所詮活躍の場がないわけですから、淘汰されて行くのではないのでしょうか？参加費の減収は大問題ですが……。英語化のトレンドは他の学会でも同じこと。止む終えない場合には日本語でディスカッションできる余地を残しつつ、論文のみならず口頭発表も英語が基本……という常識をどの学会が先行して定着できるかということではないのでしょうか？(40)
- ・ 特に問題は起こらないと思います。若い人は特に英語が上手です。(51)
- ・ 心配されるほど、英語の発表がわかりにくくはないようです。みな英語力が向上しているせいでしょう。(67)

- ・ 若い研究者であるほど我々世代に比して英語に対するアレルギーが少ないと思います。(93)

(B) 種々の危惧を指摘する意見

- ・ 英語で発表することに不慣れな大学院生が、大会を敬遠してしまう危惧があるように思われる。(3)
- ・ 結果として、門戸がせばめられ、参加者数が減少する。とくに学部学生や教育専門の大学等の教員にとっては敷居が高くなる。(5)
- ・ コメディカルや医学修士の連中に目を向けさせたいなら、大きなネガティブ要因になっています。私の大学のコメディカル連中は、学会の英語化に反比例して参加しなくなっております。自分の専門外の口演を聞こうとする会員(特に若い人)がどのくらいいらっしゃるのかわかりませんが、私のように、それを大きな参加目的とする者にとっては大きなデメリットであることは事実です。(29)
- ・ 今後生理学会大会参加者をコメディカルの方々に拡大することを本格的な方針とする場合は、敷居が高くなり、参加者数が減少する可能性はあるかも知れない。(43)
- ・ 生理学会の敷居を高くし、日本人初学者や他分野からの参加者が減少してしまうことが懸念される。発表者の英語能力は向上していると思う。しかしながら、大学・大学院入学者のレベルは残念ながら低下傾向であり、大学では多様化(二極化)した学生への対応措置が必要になっている。現状では、英語化は多少無理な背伸びのように感じる。私は、生理学会に限られた(エリート)集団の集まりに閉じることを恐れる。しかし、学会員の国際化・レベルアップを、学会の拡大や医学会・日本社会における理解者増より優先するというのが学会としてのコンセンサスであるならば、ある程度のデメリットには目をつぶるという判断があってもよかるう。(33)
- ・ 英語発表の準備に時間が取られる。(91)
- ・ 折角、生理学会として幅広い研究分野の人が集まって発表しているのに、英語が不得意だと他分野の発表が日本語でも苦勞するのに英語だと全く理解できなくなる。それにより、他分野の発表を見たり、聞いたりすることによる、新しい知見が得られなくなり、もしかしたら、自分の研究に応用出来、ブレイクスルー出来るかもしれない可能性がなくなる気がする。(92)

(C) まとめ

英語化の最大のデメリットは、やはり、発表の理解や意志の疎通が不十分になること、その結果、大会参加者が次第に減少し、学会が勢いを失う可能性があること、と要約できよう。(英文論文執筆を通常のゴールとしているわけではない)コメディカルの方々に於いて特に大きな問題となる、院生レベルにおいて理解に困難がある、といった危惧が示される一方で、若い人たちが英語を強く敬遠することはない、心配するほど英語の発表はわかりにくい、科学の世界では英語は基本とするのは当然だ、といった意見も見られた。コメディカルの方々を含めて生理学会が発展していくためにはどうすればいいかは、今後も検討を重ねる必要のある課題である。

- (7) 質問 7 「それらのデメリットを解決するためには、英語化を後戻りする以外にはどのような方策があるでしょうか？(例：大学院生の発表のトレーニングの場として、地方会の充実をはかる。)」についての意見

(A) 種々の意見

- ・ 即席的なことは困難。他の学会とともに国に対して諸外国のように英語を第二国語として教育していくように強く求め、早期実現を目指していく。(65)
- ・ 各教室での日常発表、討議を通じて訓練してもらえない。(10)
- ・ 各教室単位に啓蒙して、出来るだけ英語になれる機会を作って頂く。(23)
- ・ 国際的レベルで活躍できる研究者を育成するしかない。海外での学会に積極的に出て行けるトラベルグラントを生理学会でも提供する。また、宣伝活動も活発にする。機会を多く経験すれば、英語の発表、討議になれるのは早い。地方会まで一気に英語化すると参加者が減るのではという危惧を抱く。(13)
- ・ 英語論文の投稿と同様、国内学会での口演も英語化の時代であると認識し、各々が英語で話す・聴く能力を高める(ように努める)。口演の英語がまずくても内容が理解できるよう、提示スライドを分かりやすいものにする。(21)
- ・ プレゼンテーションのスキル(英語での発表力を含めて)が向上するような活動を学会としてする。セミナーをやる、本を出す、抄録集に提案を加える。(34)
- ・ スライド(パワーポイント)の作り方を工夫するように(理解しやすいものにする)、奨励例を学会が提示する。こういうことは英語化に拘わらず、プレゼンテーションのスキルアップに大きく貢献する。(96)
- ・ 地方会の活性レベルは地区ごとによりかなり差があるようですが、地方会を大学院生のトレーニングの場として英語化推進に活用することには賛成です。(40)
- ・ 地方会でのトレーニングは重要と思います。(51)
- ・ 大学院生の発表のトレーニングの場として、地方会の充実を図る。(68)
- ・ 地方会での口頭発表を充実する。(74)
- ・ 将来は生理学会の東アジア各国との共催も考えるべきか。あるいは、薬理学会との共催にして日本のみを開催を維持する道を選ぶか？(17)
- ・ せめて教育講演だけでも日本語にしていたきたいというのが正直なところ。日本語の抄録を用意し、大体的内容が先にある程度、容易にわかるようにしてもらえると少しは助かると思う。英語化にするのであれば、結局、本人の努力で不自由のないようにするしかないような気もしますが…。それに対して学会として何かをあえてしようとするのであれば、教材、辞書などを作成することも検討してもいいかもしれない。(82)
- ・ せめて、ポスター発表では、英語と日本語の併用にしてほしい。国際化と数年前からいっているが、実際、参加している外国人は1割にも満たない気がする。それならば、日本人同士気軽に発表出来、意見交換しやすいような環境も作っておいて方が良いと思う。(92)

(B) まとめ

アンケート質問の後に付加した「例」の意味は、「大会の英語化・高度学術化が進むと、大学院生がはじめて発表するトレーニングの場としては厳しい感があるので、それを補うものとして、地方会を充実させて、日本語で発表し、日本語での徹底的な質疑応答によって発表の基礎を鍛える機会とする。つまり、大会と地方会(トレーニングの場)で役割を分担し、どちらも大切なので地方会のさらなる充実をはかる。」というものであった。しかし、表現が不十分であったため、地方会で英語発表の訓練をするという意味

に解釈された方が多かった感がある。いずれにしても、鍛錬の場としての地方会の重要性は広く認識されているようである。その他、英語でも分かりやすい発表ができるよう、プレゼン法、スライドの作り方を工夫する、その講習を行う、等の意見が見られた。また大会において、限定的に日本語の部分を求める意見もいくつか見られた。

(8) 質問 8 「英語化は、大会の国際化を通して、大会・学会の発展をはかることを目的としています。大会の国際化のために、英語化以外にどのようなことを行えばよいでしょうか？（例：海外からの参加者のためのトラベルグラントをさらに拡張する。）」についての意見

(A) 種々の意見

- ・ 日本から良い研究がどんどん発表される事に尽きる。(14)
- ・ なぜ、日本の学会を国際化しなければいけないのか理解できない。国際学会は国際学会である。例えば、我々が中国の生理学会に英語化されたからといって参加したいと思うだろうか。その国の学会はその国の言葉でやり、その国のその分野(生理学界であれば生理学)の横のつながりを強くし、若手を育て、国としての底上げをすることが目的であるべきである。(35)
- ・ どんなにがんばっても、SfN のようになれるわけでもなく。規模は小さくても深くディスカッションできる場の方がどれだけ日本の科学発展にとって有益かが判っていない。(90)
- ・ アジアの国際学会もある中で、国際化、それも例題のように餌で釣って外国人の参加を増やすことで国内大会が発展するという考え方自体がおかしいと思います。国内の参加者により魅力あるものとし、発展させて行くことで、自ずと外国からの参加も増えると思います。トラベルグラントを出す金銭的余裕があるのなら、もっとみんなが話を聞きたい一流の研究者を招待して、口演していただく方にまわすべきだと思います。また、日本生理学会が主催する国際学会を別に作るというような考え方は無いのでしょうか？(29)
- ・ 海外からの参加者のためにトラベルグラントをさらに拡張することは不賛成。(52)
- ・ 海外からの参加者のためのトラベルグラントをさらに拡張する。(68)
- ・ アジア地区の研究者の参加を促進するための、より組織的な取り組みを行う。2009年 IUPS をその契機とする努力が望まれる。(43)
- ・ FAOPS や近隣各国の生理学会との連携。(67)
- ・ 生理学での韓国のレベルが良くわからないのですが、日韓で共催として生理学会(あるいは生理学会のサテライト学会)を隔年で日本、韓国で開催する。準備から発表まで英語で行わざるを得ないので英語化にはうってつけではないか。韓国での開催なら、日本とほとんど旅費や滞在費は変わらないのでは？(2)
- ・ 国際化にはやはり、英語化が必須だと思います。多少困難がありますが、ある程度のコストをかけてでも英語化は必要。英語化以外となると、その時代のトピック、ノーベル賞受賞者講演、話題の人物を呼び、この講演情報を近隣諸国に流し、その近隣諸国からの参加者を増やす努力を続けるのはどうでしょうか。(12)
- ・ 国外からの参加者を増やす点では、学術的な視点でなくて恐縮ながら、学会開催地を国外からアクセスのしやすい大都市、あるいは国際的に有名な観光地を近くに擁する都市にする。(そうすると国際的知名度の低い地方都市での開催は難しくなる・・・)(21)
- ・ 英語のホームページを充実、海外への姉妹サイトにリンクさせる。(93)

(B) まとめ

優れた研究が出されることが何より大切という意見はそのとおりであると考えられる。それ以外に、韓国等のアジア近隣諸国との連携、優れた特別講演のさらなる充実、(賛否両論あると思われるが)アクセスのよい大都市での開催、広報の充実等の意見が見られた。トラベルグラントについては、両極の意見があった。また、母国語で行い国としての底上げを目指すべきだという国際化を目指すこと自体に対する強い否定的意見も見られた。

(9) 質問 9 「学会、大会の活性化と発展のためのお考えをご自由に記述下さい。(例: やみくもに会員数を増やせばよいというわけではない。)」についての意見

(A) 種々の意見

- ・ 生理学雑誌68巻1号に小泉周氏が「Vision」で書いておられた最後のポイント、医学部出身者による運営や発想が主体だと言うことを強く感じます。特に私は理学部出身で歯学部に関わり、また、理学部に戻った者ですが、歯学部時代にもこのことを強く感じていました。現在医学部や歯学部から他学部出身者が減少しつつあると思います。学会がこれまで通り、医学部出身者を中心に発展をお考えでしたら何も言うことは有りませんが、医学部外の会員を取り込もうとお考えでしたら、このあたりの発想から変える必要があると思います。たとえば、理学部出身者にも科研費がもっと当たるようにするとかです。しかし、一方で、「神経科学会」などどのように差別化を図るかも重要な課題だと思います。(20)
- ・ 国際化も大切ですが、その前に国内の生理学関連分野の人が広く集まることのできる場にする必要があると思います。現在の英語化は、単に現在参加している会員のレベルを変えることに主眼があり、(今回もポスターにあった)「生命の理に興味を持つ人」を集められない体質の変革には寄与できないでしょう。生命科学全分野からの参加を促す方策を考える、さらに学部学生のみならず中学高校生および教員の参加を積極的に推し進める(トラベルグラントや賞など)方策もとる必要があるのでは。そもそも、日本医学学会に所属する学会だからといって、アンケートのように質問 10 医学部の生理とその他の学部を分ける必要があるのでしょうか？生理学が「生命の理」を学ぶ学問であることを標榜するならば、生命科学系全ての学部・学科に生理学は必要ではないでしょうか。その意味で生理学はもっと(political ではなく Scientific に)生命科学系全体に拡充する必要があります。このように「医学部」にいつまでもこだわっていると、他学部・学科系から「生理学」は医学部のもので、自分たちには必要が全くないという誤解を与えます。質問 10 は、その意味で別の尋ね方をすべきでした。(32)
- ・ 学会の会員動向を示したグラフを見たが、学会員は減少傾向にある。また「生理学教育と研究における問題と提言」に記載されているように生理学教員の削減も進行している。言うべきことを主張し、提言を行うことや、各大学での教員の生理学教室の規模維持のためにはたらきは重要であろう。一方、学会の会員動向グラフは会員の過半数が医歯系以外であることも示していた。生理学会をどのような人たちの集まりにすることが望ましいのであろうか？高レベルの医歯系専門化集団を望むのか、広さを求めるかの判断は重要であろう。生理学は決してとっつきやすい学問ではない。教育の底が低下し、学問においても即有用な実用性重視の社会的流れの中で、(あえて突き放したひどい言い方をすれば)生理学者は理屈っぽくはっきりしたことを言わないおたく人間と見られかねず、敷居が高めな生理学に参入しようとする学生

を増やし、学会の縮小傾向を反転させることはたやすいことではない。少数精鋭主義ならば、学会の縮小や英語化に対する懸念には目をつぶってもよいように思う。しかし、もし学会を大きくすることが重要であるならば、学会をより敷居の低い気軽な雰囲気のある会にし、医歯系以外の参加者増のための努力等も検討すべきかもしれない。また大会の英語化は、現状では学会規模の拡大のためには結構重い足かせになっているような気がする。(33)

- ・ 中国人などの外国人ばかりを見ず、もっと、国内の医学科を中心とした大学教員以外に広く門戸を開き、参加しやすい環境づくりの方に目を向けるべきです。また、最近急増している医学科修士学生もターゲットとすべきです。地方会はレベルが低すぎる上、地域によっては専門内容に偏りが顕著で、こういった連中にも魅力があまりあるものではありません。面白いネタは必ず本会に再登場するようですし、これを禁止すれば、いよいよ地方会のテーマが貧弱になるばかりです。トラベルグラントはこういった連中にこそ出すべきと考えます。(29)
- ・ 20 - 30 年前には大きな大学医学部の教授たちが学会運営の中枢を占め続けていた(少なくともそういう印象を与えていた)のにくらべて、幹事の構成を見ても、そうでない人達を中心になっているし、医学以外の分野の人達がどんどん加わってきている。その動向をもっと強く受け止めて、その人達が自分の主たる活動の場として生理学会を考えられるような魅力を持たせるべきだろうか。医学部で正統の生理学を進んできたものとして、残念な思いがないわけではないが、コメディカル分野の広がり、理学系の人達の流入が現実である以上、これは当然の流れと考える。(61)
- ・ 1. 医学部出身者のための学会というイメージを払拭すること。生命科学を研究するあらゆる研究者に広く開かれた学会であることを実質化するような学会運営を行うこと(例えば、教育委員会の取り組みなどは non-medical life science students も視野に入れて企画する)。 2. アジア地区の研究者が多数参加する学会大会とするための工夫を行うこと。(43)
- ・ 生理学会は、NO 学会・Dahl rat 学会などのようにテーマを絞った学会ではない。その分、話題性による参加者牽引力は低い、同時に時代によって変遷テーマの波に巻き込まれない。逆に言うと、その時代の興味に見合ったテーマを設けることで、参加者の吸引力が出せる。この点から、その時代のトピックを牽引する中心人物を講演者に呼ぶ、という考えですが、既に行われていますね。問題は毎年そのようなトピックとそれを牽引する人物が現れない、ということでしょうか。しかし、毎年、ノーベル生理学賞、ラスカー賞、などが選出される訳ですから、1~2年遅れでもこういう方々をお呼びするのは一案でないでしょうか。単発の論文的研究発表も重要ですが、最近の嗜好傾向は、まとまった研究ストーリーを聞いてその分野のガイドラインを勉強して、自分の研究室に帰りその新しい情報を何か(自分の研究分野や教育内容)に利用する、という方向にあるのではないですか。こういう点から、十分なシンポジウム(一人30分位で5人くらい、質疑応答を入れて、合計3時間位)を中心に学会を運営するのはどうでしょうか。確か、2001年に京都で行われた生理学会がそのパターンを採り、評判が良かったと思います。シンポジウム・テーマは広げすぎないようにし、シンポジウムした限りはそのテーマでは充分議論してもらおう、というやりの方が、参加者が増えると思います。単発論文の口頭発表は、かなりテーマを絞って、反論が渦巻いている時代のトピックを3つくらい取り上げ、1日に1つずつ熱く議論してもらおう、というのが参加者が集まると思います。そのためには、大会主催者がどういう点が議論的になっているか、誰がその理論や説の中心人物であるか、などをアピールする宣伝する文章を発表する必要があります。以前、シドニーで、ネットワーク説とペースメーカー説をテーマに小さな学会が構成されたことがありましたが、会場は大変な熱気でした。(12)
- ・ やはり、生化学学会など他の学会との合同開催の時のほうが学会は盛会となるのではないのでしょうか。

開催地はできるだけ大都市としてアクセスがいいほうが助かります。生理学の学会参加者なら、あたりの観光を目的の人は多くないような印象があります。それと、これは理想論ですが、学会誌が high impact journal になれば自然と活性化する気がします。Genes to Cells の生理版は難しいのでしょうか？(2)

- ・ 海外の研究機関にポスドクに出ている多くの若手日本人研究者をひきつけるような取り組みをしていただきたい。たとえば、国内でポストを見つけるきっかけ作りとなるような特別な場を学会が提供していただくなど。(3)
- ・ 数年に1回ほど、他の学会と共同開催。(44)
- ・ (1) いくつかの session に native speaker で顕著な生理学者を招いて discussion を盛んにする (Journal of Physiological Science の外国人 editor を招くのもよいかも知れません)。(2) 他学会との Joint Symp は継続する。(72)
- ・ ホームページの最近の充実ぶりのような、広報活動が重要。(14)
- ・ 学会場の選定を慎重に行うべきだと思う。他県・他国からの交通網、学会場内での移動 etc を踏まえて決めた方が良いと思います。(73)

(B) まとめ

例としてあげた、やみくもに会員を増やせばよいというわけではないという一文が議論を刺激したようである。高度学術化・国際化を目指す路線と、広く会員層を広げることが、相反する点があることも事実である。久保の私見としては、日本生理学会が医学科生理を中心とした権威的、排他的集団であるとは感じない。医学系の生理学者が、他学部からの新しい参加者を歓迎し、生理学の発展につながるものと喜びこそすれ、それを拒む気持ちをもっては考えられない。いずれにしても、出身学部にとらわれず、生理学に関心をもつ人々が広く生理学会の活動に参加できるよう学会運営のあり方に一層の工夫をこらすことが非常に重要であることは疑う余地がない。

難しい点は、端的な表現として、「英文論文発表を研究のまとめとしている研究者」と、「そうでない分野の方々」との目指すところのギャップであろう。前者の場合、英語発表ができなくてはすまないが、後者はそうではない。両者が共存して充実していくことは、確かに難しい問題であると感じる。地方会を有効に使う、特別なプログラムを用意する等の考慮が必要かもしれない。

その他の意見としては、焦点をあてた厳選されたテーマについての十分なシンポジウムの実施、院生の参加の促進、海外からの参加者の促進、他学会との乗り入れや合同大会の実施、ポスト探しの機会の提供、大会開催地の考慮、広報の重要性などがみられた。

寄せられた意見は、まさに多種多様であり、ここで簡単に要約することはできない。**ぜひ、追加資料の全文もお読みいただきたい。**

5. 全体のまとめ

- (1) 回答数は 102 であった。
- (2) 回答者を所属別で見ると、会員における割合に比し、おおきな偏りはなかった。教授、

長期留学経験者の回答者の割合が会員における割合より高く、院生を中心とする若い世代の回答者は低かった。

- (3) スコア集計において、質問1「英文抄録」、質問2「英文ポスター」、質問5「外国人トラベルアワード」については、広く支持を得ていた。
- (4) スコア集計において、質問3「英語の特別・教育講演」、質問4「英語の一般口演」についても、肯定的な意見がまさり、一応の支持を得ていた。しかし、質問3において、強い否定的意見が他の質問項目よりも多かった。英語化が、他分野を概観することの障害となることを反映していると思われる。
- (5) 「抄録」については、非会員参加者が英文抄録を受けとることができない問題点が指摘され、対応が必要と考えられる。
- (6) 「ポスター」については、要旨の和文・英文併記を求める意見が多く見られ、検討に値すると考えられる。
- (7) 「特別講演」、「一般口演」については、討論の充実のため、日本語での質疑応答が必要であるという意見が多く見られた。討論は日本語でよいことを、より明確に周知する必要があると考えられる。
- (8) 「トラベルアワード」については、海外からの参加を促すという意義を高く評価する意見がある一方で、日本人にも与えられるべきだ、学術レベルが低い点が問題だ等の意見も見られた。全体としては、前進するのが妥当だと考えられる結果であった。
- (9) 質問6「英語化のデメリット」については、発表の理解や意志の疎通が不十分になること、その結果、門戸がせばめられ、大会参加者が減少する可能性があることが最大の問題のようである。「英文論文を成果発表方法としている方々」と、「そうでない分野の方々」との目指すところのギャップは、確かにあるので、両者が共存して、学会大会を実りあるものとするために、さらに検討を重ねることが必要であると考えられた。
- (10) 質問7「デメリットに対処する方策」については、若手等のトレーニングの場としての地方会の充実が、支持を得ている感がある。それ以外に、英語でも分かりやすい発表ができるよう、プレゼン法を工夫する、そのための講習を行う等の意見、大会のプログラムにおいて、限定的に日本語のセッションの設置を求める意見も見られた。
- (11) 質問8「国際化のための、英語化以外の方策」については、近隣諸国との連携、優れた特別講演のさらなる充実、アクセスのよい都市での開催、広報の充実等の意見が見られた。トラベルグラントについては、(8)で記したように、両極の意見があった。
- (12) 質問9「学会活性化の方策」については、医学科生理を中心とした医学系の学会であるという旧体質の打破と他学部からの参加の促進、に関する意見が多数寄せられた。広い生命科学分野からの参入の促進、さらに、院生の参加の促進の重要性は、広く認識されていた。一方で、方策については簡単に要約できないが、学術的に魅力ある大会プログラムのさらなる充実、他学会との連携の促進等の当然のものに加えて、ポスト探しの機会等のメリットがある大会にすること、国内外のトラベルアワードの重要性、広報の重要性等の具体的意見、国の初等教育の改革に関する意見が見られた。

6. 謝辞

お忙しい時間を割いて、貴重なご意見をお寄せ下さった皆様に心より感謝申し上げます。また、メールでのアンケート回収にご協力下さった生理学会事務局の方々、用紙での回収にご協力下さった群馬大会大会長の小澤瀨司先生、事務局長の鯉淵典之先生をはじめとする方々、データ整理にご協力下さった生理研・神経機能素子の山本友美氏をはじめとする方々に、感謝いたします。どうもありがとうございました。

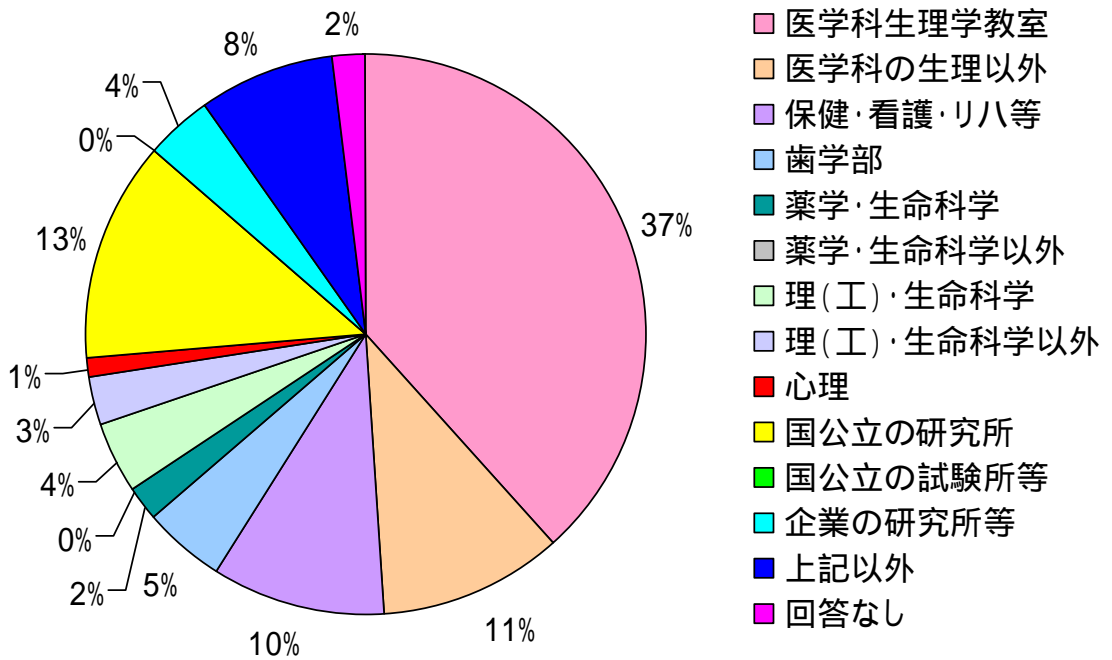


図1 所属についての質問 10 に対する回答

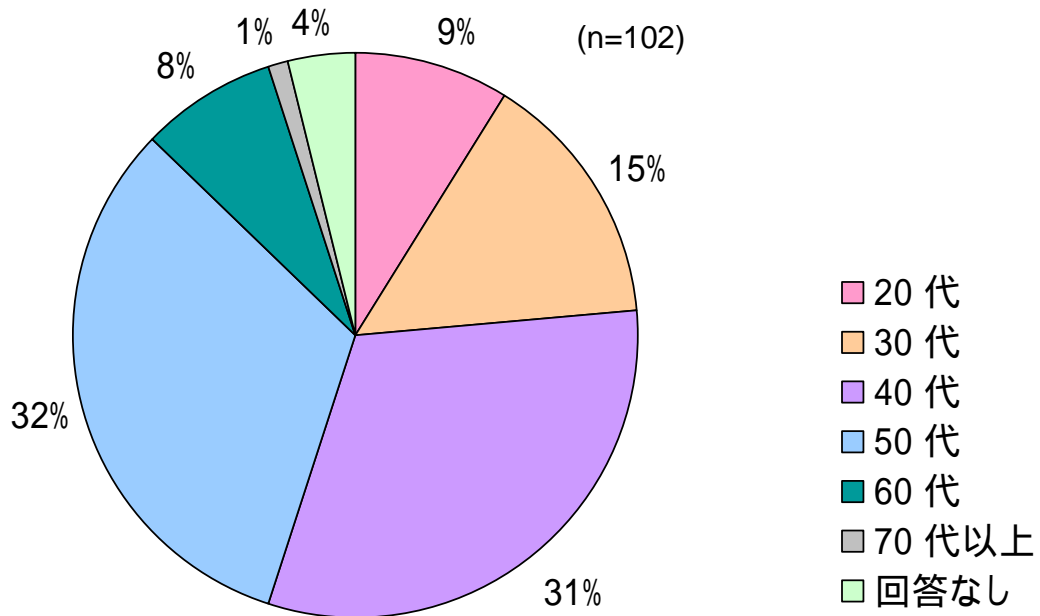


図2 年齢についての質問 11 に対する回答

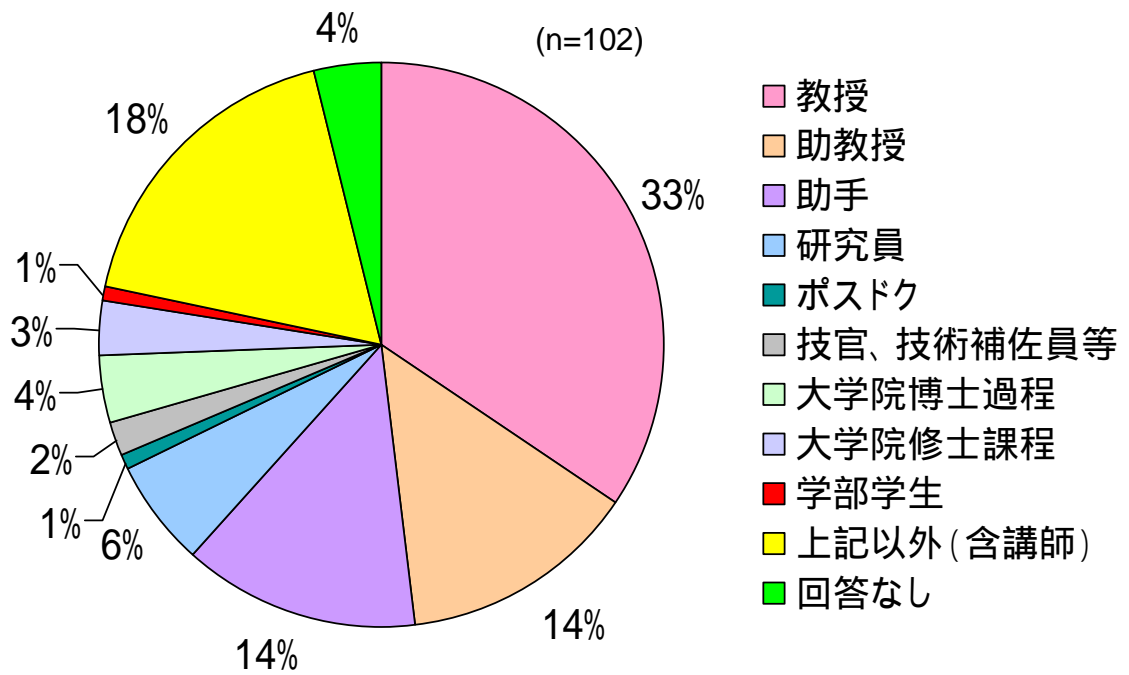


図 3 役職等についての質問 12 に対する回答

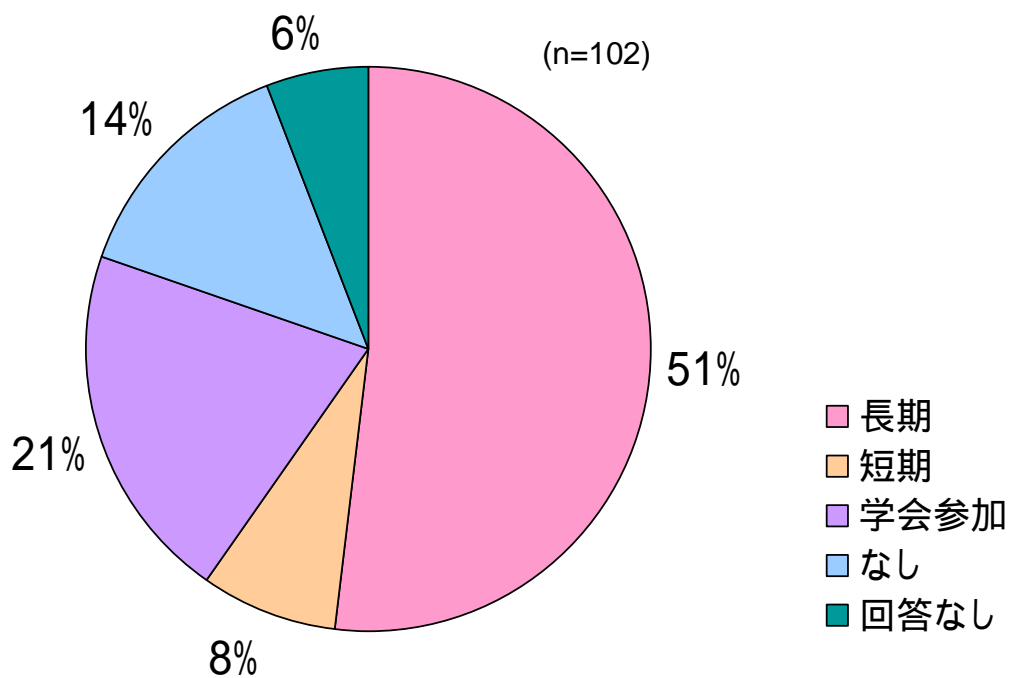
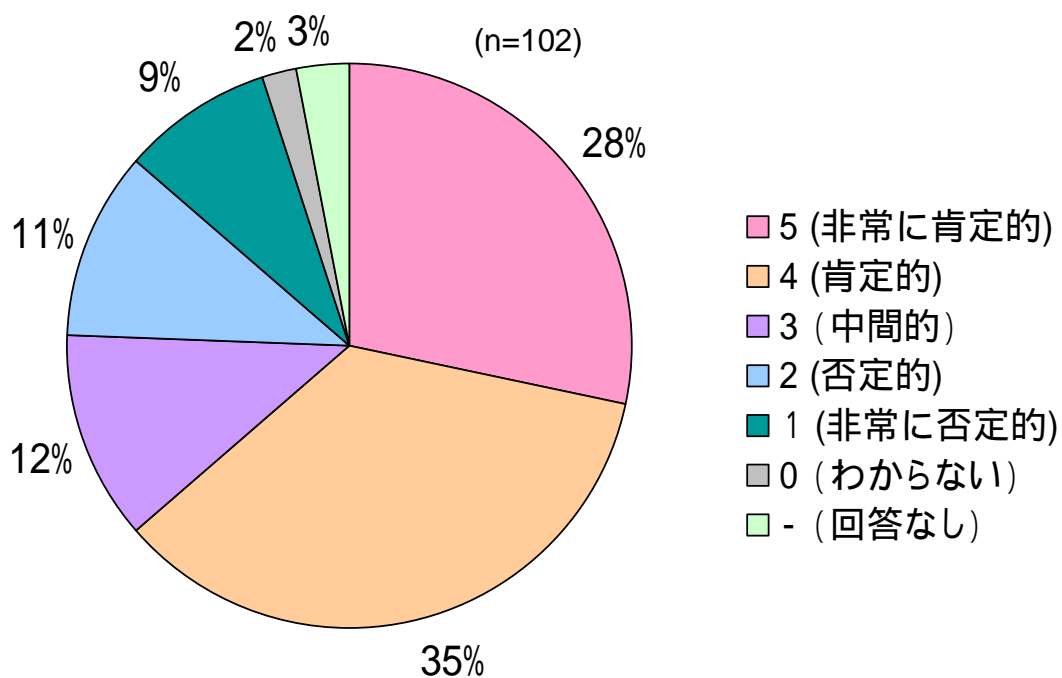
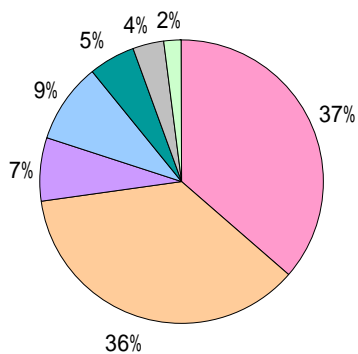


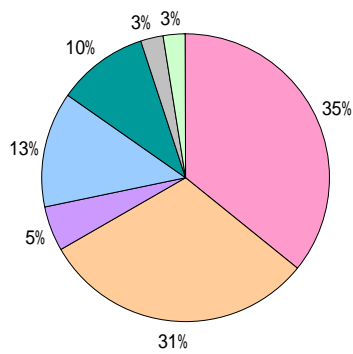
図 4 留学経験等についての質問 13 に対する回答



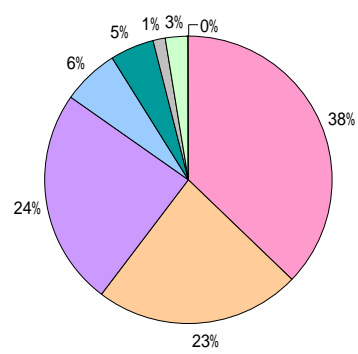
長期留学経験あり (n=55)



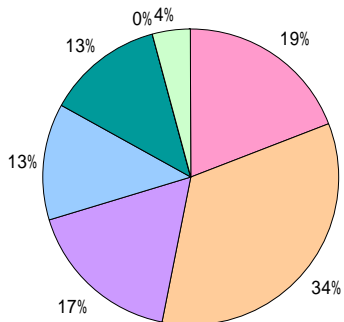
医学科生理 (n=39)



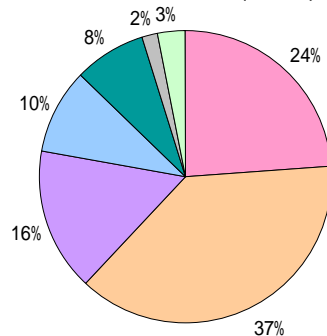
教授・助教授 (n=49)



長期留学経験あり、以外 (n=47)



医学科生理、以外 (n=63)



教授・助教授、以外 (n=53)

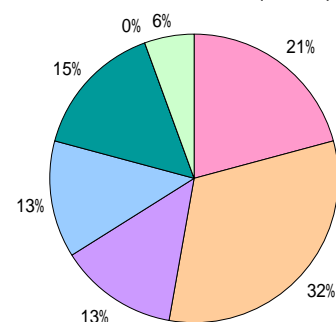
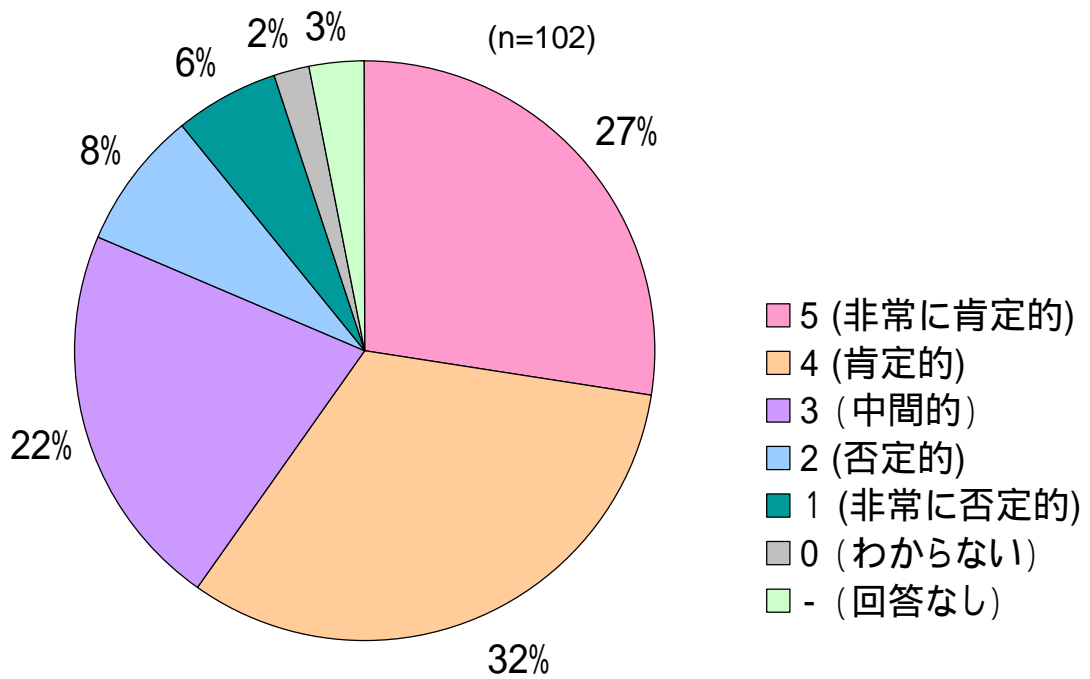
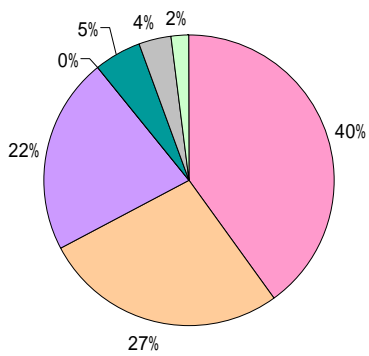


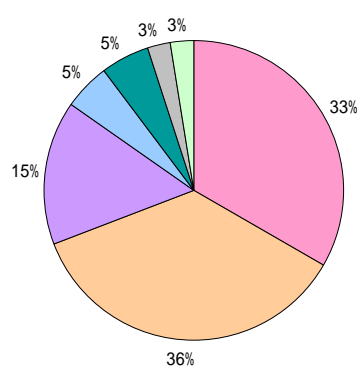
図 5 変更点 1 「和文抄録を廃止し、事前配布の英文抄録に一本化。ただし、演題、氏名、所属の英文、和文併記のプログラム集を別途配布。」についての質問 1 に対する回答



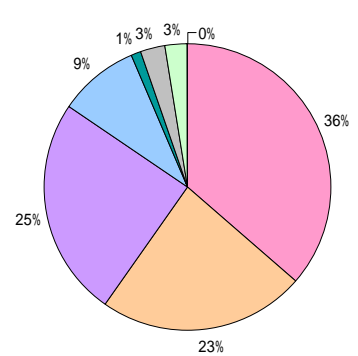
長期留学経験あり (n=55)



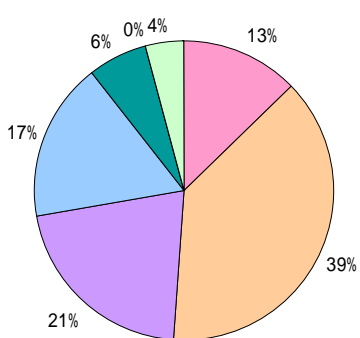
医学科生理 (n=39)



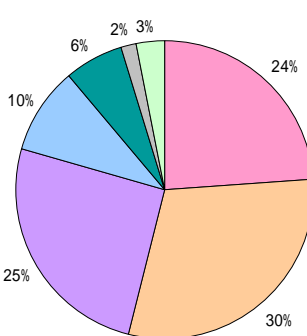
教授・助教授 (n=49)



長期留学経験あり、以外 (n=47)



医学科生理、以外 (n=63)



教授・助教授、以外 (n=53)

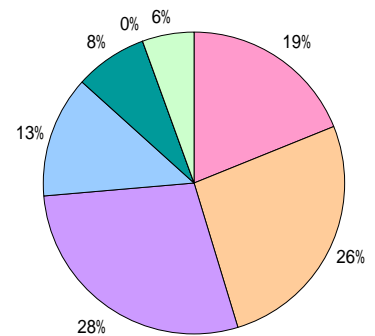
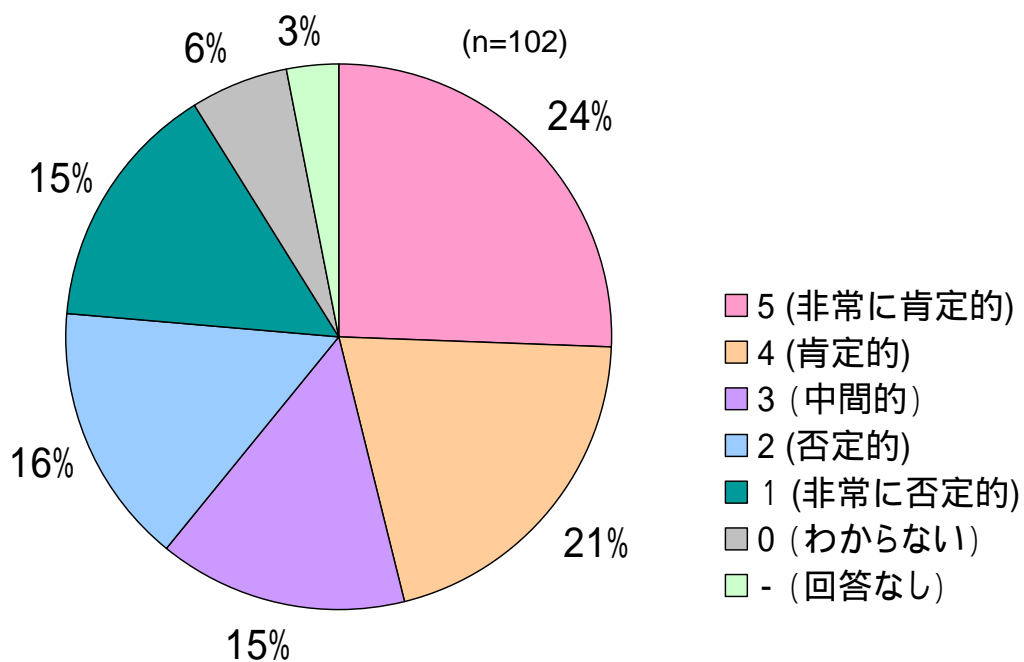
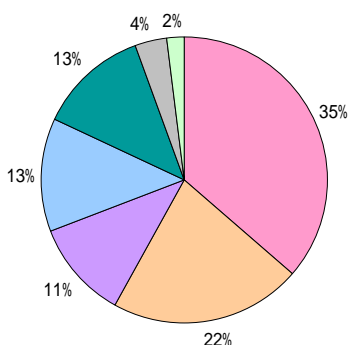


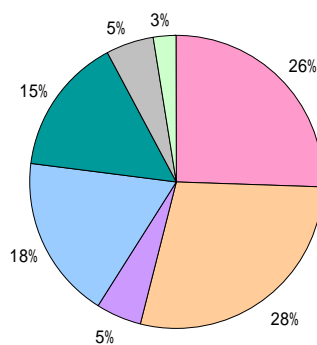
図 6 変更点 2 「ポスターの記述を英語化。ただし、演題、氏名、所属は、英文・和文併記。」についての質問 2 に対する回答



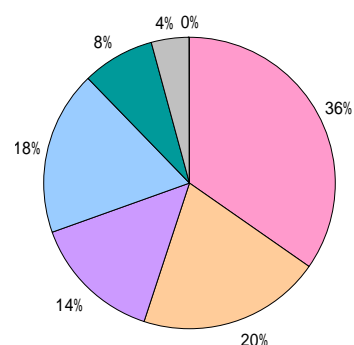
長期留学経験あり (n=55)



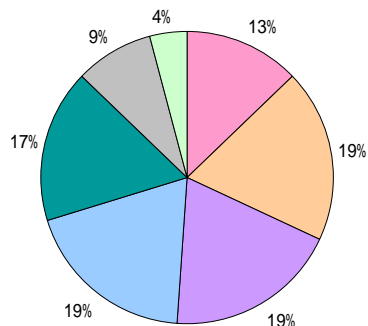
医学科生理 (n=39)



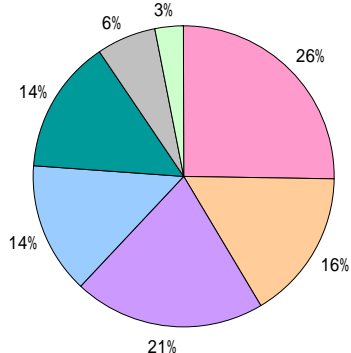
教授・助教授 (n=49)



長期留学経験あり、以外 (n=47)



医学科生理、以外 (n=63)



教授・助教授、以外 (n=53)

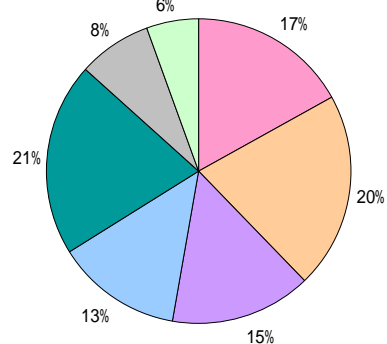
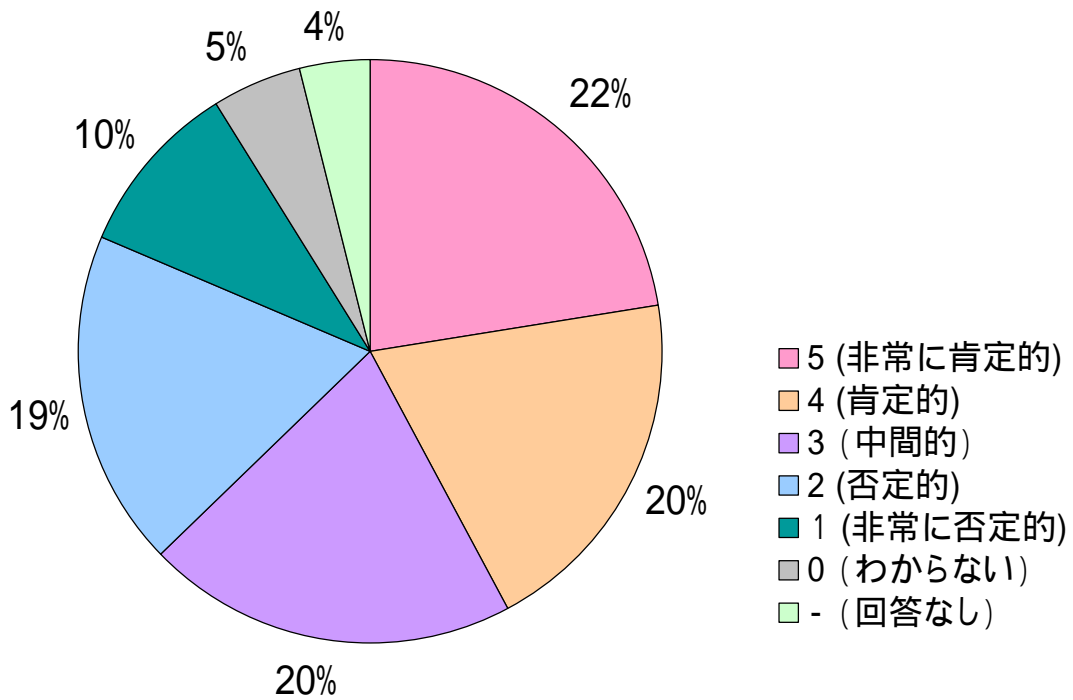
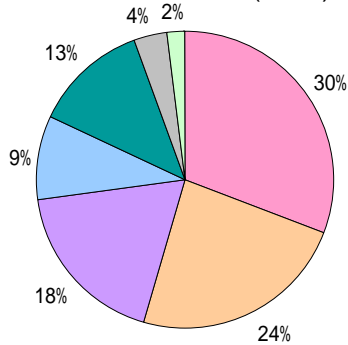


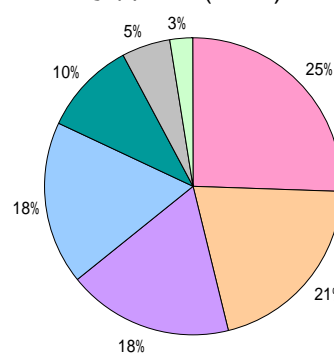
図 7 変更点 3 「特別講演、シンポジウムの発表を英語化。ただし、質疑応答は日本語可。また、一部の教育講演、生理学教育・動物倫理等のシンポジウムは例外とする。」についての質問 3 に対する回答



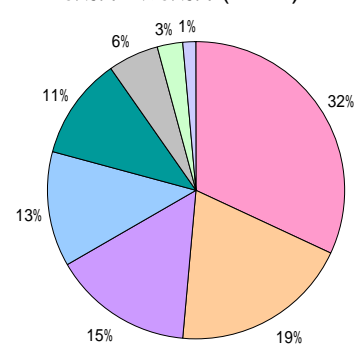
長期留学経験あり (n=55)



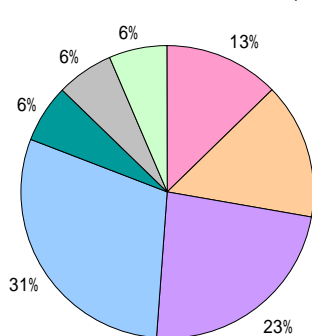
医学科生理 (n=39)



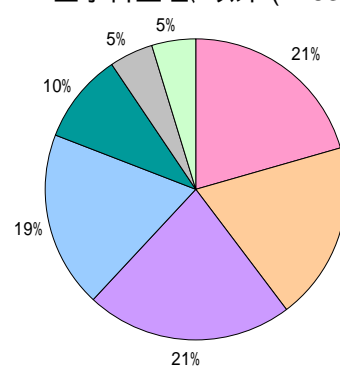
教授・助教授 (n=49)



長期留学経験あり、以外 (n=47)



医学科生理、以外 (n=63)



教授・助教授、以外 (n=53)

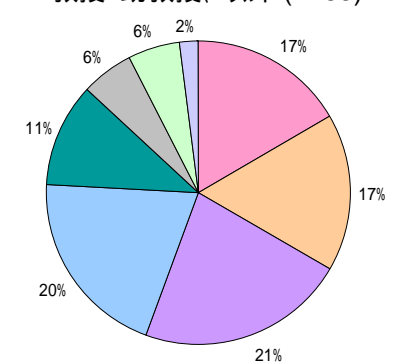


図 8 変更点 4 「一般演題のうち、発表者が英語での口演を諾とするものの中から、プログラム委員会が選抜して、英語での一般口演のセッションを実施。ただし、質疑応答は日本語可。」についての質問 4 に対する回答

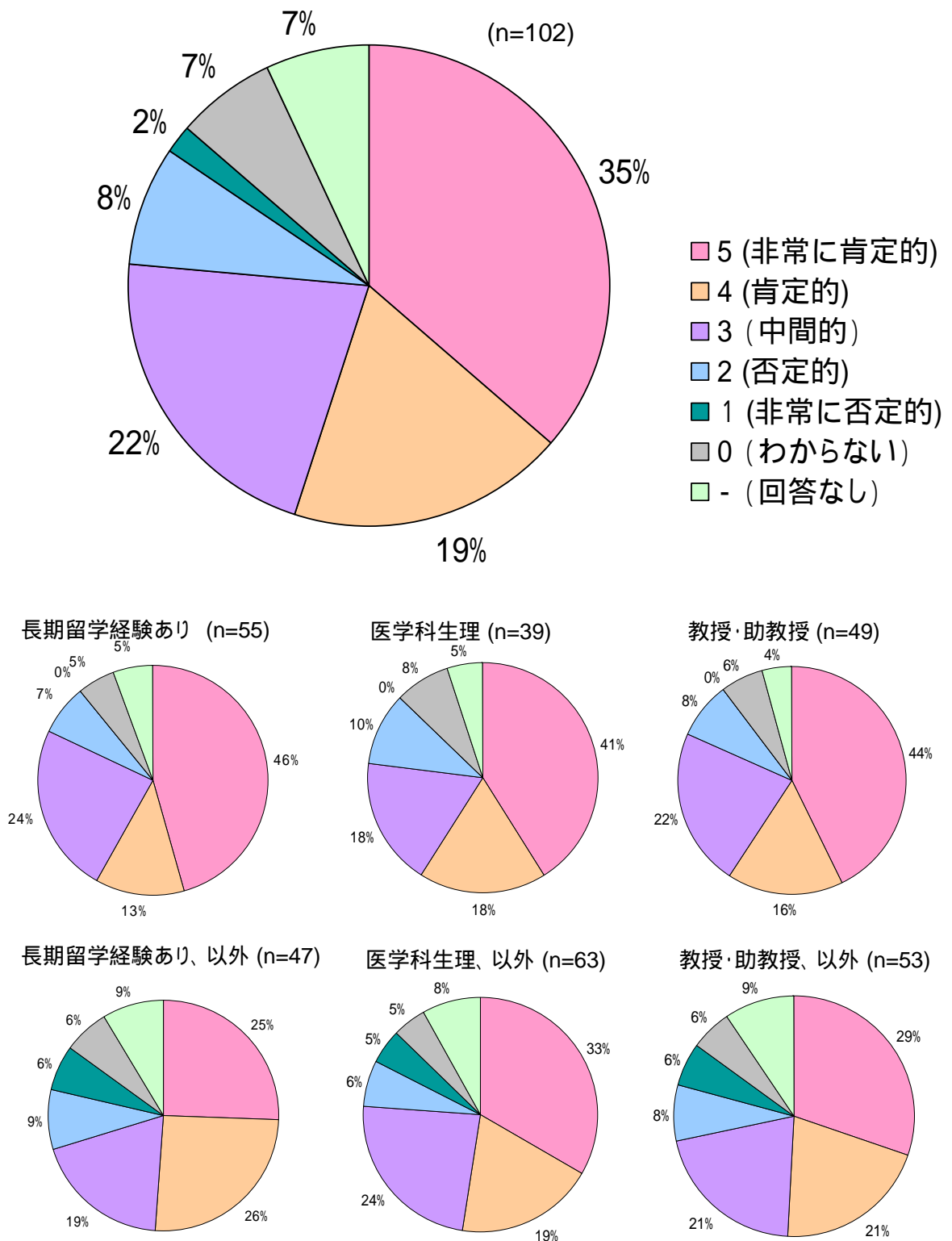


図 9 変更点 5 「英語での一般口演のセッションには、外国人の発表演題も公募して、その一部にトラベルアワードを支給。」 についての質問 5 に対する回答

追加資料 寄せられた自由意見の完全版

(注: 各意見の末尾の数字は、回答者につけた通し番号です。)

質問1: 変更点1「和文抄録を廃止し、事前配布の英文抄録に一本化。ただし、演題、氏名、所属の英文、和文併記のプログラム集を、別途配布。」についてのご意見をお聞かせ下さい。

- ・ 学術団体ですので、方向性は大変望ましいことであると思います。(1)
- ・ 若い人たちにはむしろ英語化が進んでいるので、意外と容易に受け入れられるかもしれません。ただし、敷居が高くなり、参加が敬遠される可能性があるとは思いますが。(2)
- ・ 参加者のほとんどが日本人という現況を鑑みても、演題・氏名・所属の和文併記は利便のために必要と思われる。(3)
- ・ 生理学会が広くその活動を公表するためには日本語での表記は不可欠です。しかし、国際化のためには英語表記が不可欠です。国際化・高度学術化を進めていくために広く多くの実務家の関心を引くものでなくてはならない。(4)
- ・ 和文で読むスピード、理解は英文の場合の数倍なので、和文抄録(以前の予稿程度の短いものでも可)もほしい。(5)
- ・ 経費節減の観点からは意味がありますが、学会活性化の観点からは無意味と考えます。他分野の講演やシンポジウムを聞く可能性が全くなくなるでしょう。(6)
- ・ 「和文抄録を廃止し、事前配布の英文抄録に一本化する」には賛成ですが、そうであれば「ただし、演題、氏名、所属の英文、和文併記のプログラム集を、別途配布」は必要ない。全くの国際学会基準にすべき。(7)
- ・ 研究の国際公用語はやはり英語なので英語抄録のみでよいと思う。(9)
- ・ 当番幹事の手間が掛かりすぎる。英文抄録のみで可。(10)
- ・ 短い和文は意味がなかった。改善されたと思う。(13)
- ・ 演題は和文があった方がぱっと見て興味のある分野を探しやすく分かりやすく良いが、氏名や所属は英語のみでも良い。(14)
- ・ 英文・和文併記のプログラム集の別途配付は、是非、続けてほしい。(15)
- ・ 自分の考えを外国に広く広めたいと思うなら外国の学会や国際学会があるのだし、日本人が日本で科学を論じるのになぜ英語でなければならないのか疑問に思う。この学会はごく一部の英語が自由自在の人が幅を利かすのではなく、英語が不得意だけれど生理学が好きな多くの日本人研究者のための学会であってほしい。また、英語で話すことより、中身を議論することに重点を置く場であってほしい。(16)
- ・ 英文抄録を当日持参しない可能性があります。別途配布のものに、発表当日の案内(参加者への注意事項、発表形式、学会へのアクセス等)を必ず日本語と英語で併記する必要があるので、編集作業は返って煩雑になる恐れがあります。また、コストもかさむのでは。(20)
- ・ 国際交流のために必要であろう。(25)
- ・ 英語化自体は良いと思うが、この方式だと 11 月までの結果で抄録が作られる為、冬の実験結果が発表に反映されず、鮮度の落ちたネタの話しか聞けない。場合によっては on line journal が先に出ているような話ばかりだと、学会の学問的意義が薄れ、親睦会と化す。(29)
- ・ 少なくとも英文抄録は学会場に持ってゆかない(重い、かさばるから)、英文抄録の内容と実際の発表の内容の齟齬は問題にならないのか? その点を考えると昔の「和文抄録あり、事後英文抄録の配布。」の方が実際に近い。極端なことを言えば発表登録すれば、発表しなくても学会発表したことになる。(31)
- ・ 抄録は CD で配布、希望者には冊子体を有償配布、という方が効率的ではないか。(プログラム集は冊子体の方が便利だと思われます)(32)
- ・ 従来の日本語の抄録集が、短すぎて不十分だった点も改良された。(34)
- ・ 英文抄録は、事前には会員にしか配布されませんでした。非会員の参加者には、参加費に予め上乗せする形で抄録代を徴収し、会員同様に配布していただきたいです。また、プログラム集と英文抄録集の順番がバラバラなために対応付けに苦労しました。せめて、プログラム集に抄録集のページ番号を載せるとか、

抄録集にだけある「P006」などの通し番号をプログラム集にもつけて欲しかったです。(38)

- ・ 日常読む論文は英語なのだから、抄録が英語で困ることはない。二カ国語が必要とは思えない。英語で抄録を作ると、プライオリティーが取れて有利な場合と、英語であるがために読まれてアイデアを盗まれる場合と、損得両方ある。(39)
- ・ 日本国内にとどまらず海外からも参加できるようにするためには、日本語の障壁は取り払うべき。抄録が論文と同様に英文であるのは当然。一切、日本語を廃止しても良いのではと個人的には思いますが、反対意見も多いので無理でしょうね。(40)
- ・ 「英文抄録に一本化」には賛成で何の問題も無いと思います。しかし、現行では、「事前配布に一本化」になっていて、“非会員で当日参加すると、抄録を受け取ることが出来ない”、また、“販売もしていない”、という現行のシステムは最悪です。現に、今大会で製薬企業から参加した非会員の方から、「この様なシステムをとっている学会には2度と参加しない。」と言われました。大会への参加者を増加させるためにも、当日参加者が抄録を受け取れる様にすべきと考えます。(42)
- ・ 合理的である。(43)
- ・ 和英並記のプログラム発行は必要と思います。(44)
- ・ 分野が広すぎるため、自分の分野以外の演題は日本語で書かれていても理解が難しいのに、英語だと尚更である。(47)
- ・ 両者必要。母国語を大切に。(生教、モデル授業でもいわれたが、学生の日本語力の低下が問題である)(48)
- ・ 手間が省けてよい。(53)
- ・ 意味がない。すべて和文に戻すべきである。(56)
- ・ もともと生理学会の和文抄録は200字と短いことが多くて、それでは十分に内容が書かれていなかったもので特に必要なかった。(61)
- ・ 和文を check する人がいない。(62)
- ・ 英文であっても事前配布であれば興味のあるものは目を通すことが出来るし、和文併記であればスクリーニングするには十分である。(66)
- ・ 英語の訓練になります。(68)
- ・ 演題名を内容が判るように工夫する(72)
- ・ 抄録に関しては英文表記は避けられなくなっていると思う。演題一覧のプログラム集は学会時に大変役立つ。(73)
- ・ 当日は英語発表を重視。そのためにも今の和文抄録の2倍の情報量の和文抄録を充実させて、理解を深めて当日参加できるようにする。(75)
- ・ プログラム集を英文抄録といっしょか、前もって配布してもらおうと check がしやすいと思います。それをみて抄録を見る人が多いので。(76)
- ・ 問題ないと思います。(77)
- ・ 和文プログラムはあった方がありがたい。(83)
- ・ 発表者の負担は増えるかもしれないが、できれば英文と和文の両方があればいいと思う。(82)
- ・ 和文抄録は短くてもよいから、(7~8行程度)あった方がよい。(91)
- ・ 日本生理学会であって国際学会ではないので、英語・日本語併用が好ましいと思います。(92)
- ・ すべて英文でもよい。(99)
- ・ 和がなければ、参加者の理解度が大きく減ることになる。(100)

質問2: 変更点2「ポスターの記述を英語化。ただし、演題、氏名、所属は、英文・和文併記。」についてのご意見をお聞かせ下さい。

- ・ oral presentation とは違い、英語の読み書きは慣れていると思われるので、ポスターの記載は英語でよいと思います。質疑応答は日本語可は仕方ないでしょう。(2)
- ・ 上記の理由と同じ。(3)

- ・ 和文抄録を付ける。(5)
- ・ 交通費その他経費を考えれば、日本が生理学の世界の中心になることはあり得ません。アメリカを中心として利用すればよいことです。(6)
- ・ 「ポスターの記述を英語化」することには異論はないが、そうであれば「演題、氏名、所属は、英文・和文併記」することは無意味。ポスター本文の英語が読める人は演題の英語も読めるのではないか。(7)
- ・ 他の発表でも使えるので英語表記でのほうが発表者の負担も少なくてよいと思う。(9)
- ・ 実際に実行して、英語を読むのは時間がかかるが、口頭発表を躊躇する若い人でもポスターであれば発表してくれる。(13)
- ・ 要約の和文もあった方がよい(14)
- ・ 日本語で書いてあっても読むのに苦労するのに、英語では余計に読みづらく、好ましくないとします。しかし、英語に堪能な人にはそのような苦労はないのかも知れません。特に留学生や外国人には。(20)
- ・ 国際交流のために必要であろう。(25)
- ・ 出来れば和文の抄録(英語抄録の和訳)も並記した方がよいと思う。(29)
- ・ 図表も必要な場所については日本語表記を認めるほうがよいと思います(理由は後述)(32)
- ・ ポスター発表ではアブストラクトを和文併記することが強く望まれる。限られた時間で要点をつかむには、やはり和文が必要。(37)
- ・ いいと思います。(38)
- ・ ポスターは読むものなので、英語で困ることはないはず。専門外のポスターは日本語でも単語がわからない場合が多い。(39)
- ・ 同上。英語のみ、日本語廃止でも良いのでは。残念ながら、外国人のポスターの前は閑散としている傾向がありました。(40)
- ・ 日本語の抄録を廃止するのだから、発表の際に日本語の summary をつける様にしたらどうか。(42)
- ・ 英語化の一環として適切である。(43)
- ・ まず目に飛び込むのは和文であるので、沢山のポスターの場合には、演題は和英並記がよしいと思います。(44)
- ・ 要旨、結語は日本語併記がよい。(46)
- ・ 本文も英文・和文を併記すべき。他人の発表は全くわからない。(47)
- ・ ポスターにおける英語による short presentation の実施。(53)
- ・ すべて和文に戻すべきである。(56)
- ・ あまり関係しない分野のポスターをざっと見ていくために、Introduction と Summary にも和文がついている方がありがたい。(61)
- ・ 英文のみで OK. Poster の space が少なくてすむ。(62)
- ・ 図や表は英語化されていても問題ないと思うが、Summary, Results などは併記にした方が内容の理解に十分になると考える。最もポスターの質疑は日本語でも(発表者が日本人なら)出来るのであるが…。(66)
- ・ 論文も英語なので良いことだと思います。(67)
- ・ 英文・和文併記の方が瞬時で分かるため。(73)
- ・ サマリーは必ず英文と和文を共に掲示する。(75)
- ・ Introduction は英文で読むには少し時間がかかり、理解しにくい所もあるので和文併記はどうでしょうか。(76)
- ・ それでよい。(77)
- ・ ポスターの記述は日本語 ただし演題氏名所属要旨を英・和併記。(80)
- ・ 英語化にこだわるのであれば、和文抄録があると助かる。(82)
- ・ 海外からの参加者が喜んでいた。(83)
- ・ 準備にもポスターを見るにも時間がかかる。若手の中には、英語に精通していないものもあり、折角勉強に来て、よくわからないまま帰ってしまい、実りが薄い。(89)

- ・ 質問 1 と同様。(92)
- ・ 英語を勉強段階なのでポスター内容を理解するのに、時間がかかり、多くのポスターをゆっくりみることができない。(97)
- ・ イントロ、結論などは、日本語併用の方がわかりやすいのではないのでしょうか。(98)
- ・ すべて英文でもよい。(99)
- ・ ポスター発表者が説明してくれば、問題はない。(100)

質問3: 変更点 3 「特別講演、シンポジウムの発表を英語化。ただし、質疑応答は日本語可。また、一部の教育講演、生理学教育・動物倫理等のシンポジウムは例外とする。」についてのご意見をお聞かせ下さい。

- ・ 基本は英語であって良いと思いますが、質疑応答については確かに日本語可能な条件を残してもらえると良いと思います。質問者によっては英語により趣旨がうまく伝わらない場合も考えられますので。(1)
- ・ 質問 1, 2 と同様、英語化は必要と思います。(2)
- ・ 外国人の参加者に積極的に入ってもらうためにも、ディスカッションも英語が望ましいと理想的には思える。生理学教育や動物倫理など国内特有の話題は日本語でも構わないと思う。(3)
- ・ 生理学会はコメディカル領域の人たちの参加を期待している側面もあり、また自分の専門領域以外の領域について学ぶということもあるので、教育講演、特別講演は全面的に日本語とすべき。また、英語化したシンポジウムのスライドには、1 行程度の日本語サマリー(字幕)をいれることを演者に要望すること。このサマリーは大いに役立つと思われる。すでにそうしている人があって、自分の専門領域外の話も良く理解できたので、有効だと思われる。(5)
- ・ 学会の活性化に逆行する。特にシンポジウムは他分野の研究概要を理解する絶好の機会と考えられます。これでは学会に参加する魅力が失われてしまう。(6)
- ・ 自分の研究領域から離れると、日本語の発表であっても用語の意味が理解しにくいときがある。英語化されてしまうと、発表内容の把握が困難となる。(11)
- ・ 他の学会を見ても問題は質疑応答なので、その日本語化はいいと思うが、将来的にはこれも適宜英語が望ましい。(13)
- ・ 質疑応答は原則『日本語』。『英語』でも可、としてもよいのでは。(15)
- ・ 質問1と同じ趣旨から、講演者が日本人なら原則として日本語にすべきだ。その方が話す方にとっても無駄な労力はいらぬし、聴く方にとっても細部までよく理解できる。(16)
- ・ 特別講演のみは日本語がよいと思う。分野が違えば英語による講演の理解が多くの参加者にとってはなはだ不完全であるのが実情だから。シンポジウムも一部日本語のものも続けて良いと思う。(17)
- ・ 英語の発表だとシンポジウムや特別講演を断られる場合がないでしょうか。これも時間の問題かも知れません。しかし、現時点では圧倒的に日本人が多いので、それほど意味があるとは思えません。(20)
- ・ 英語講演の自身の無い先生は、発表を避けたいという気持ちになるかも。(21)
- ・ non-native speakers の英語口演には、判りにくい場合があります。出来ましたら、通訳を置かれたら如何でしょうか。(22)
- ・ 発表言語の英語化は、IUPS の開催のためのみならず、国際的な関わりを深くしていくために、特に我々若い発表者にとっては、よい経験になると考えられる。反面、質疑応答が日本語可能であることが、一部のシンポジウムや発表などに浸透しておらず、返って英語を用いることが議論の妨げになっている感は否めない。このことは、参加した外国人(英語の native speaker)の目から見ても顕著な状況のようである。(23)
- ・ シンポジウムの一部のみを英語にした方が良いと思います。発表者全員が日本人で、参加者のほとんどが日本人、という場では、日本語の方が研究内容を多くの人に正確に伝えることができます。英語のヒアリングの練習がしたい人は、一部の英語のシンポジウムに参加し、ネイティブスピーカの流暢な英語を聞けば良いのではないのでしょうか。(24)
- ・ 特別講演は演者にお任せするのが良いであろう。シンポジウムには科学・技術的なものは英語、その他は日本語も可で良いと思う。(25)

- ・ 学会の意義の一つは、自分の専門外の仕事を知って、仕事のヒントにすることがあると考えます。これを broken English でやられると、ついていけません。パワーポイントの図表はポスター同様、すべて英文とし、簡単な figure legend をつけることを義務づければ、口演自体は日本語でも可とすべきと考えます。将来、外国人も役員になる可能性を見越し、来年度から役員会の討議をすべて英語でされますか？ (29)
- ・ 「特別講演、シンポジウムの発表を英語化。ただし、質疑応答は日本語可。また、一部の教育講演、生理学教育・動物倫理等のシンポジウムは例外とする。」に関して、例外規定を設けるくらいならどちらかにすべき。日本語で話せない学会なら「日本生理学会」は廃止しても良い。今回の学会では、ほとんどのセッションで日本語であり、まれに英語で質疑応答があったが、かみ合っていなかった。(31)
- ・ なかなか、現状では、発表者、聴衆の両方に困難が伴いますが、止むを得ないと思います。(38)
- ・ 特別講演やシンポジウムは、生理学の勉強のために聞くのであって、英語の勉強のために聞くのではない。聞くものが最大の情報を得られることを目的として言語を選ぶなら、必然的に日本語になる。(39)
- ・ 質疑応答については迷うところですが、一部、日本人同士でも英語での質疑応答が円滑に運んでいました。取り合えず日本語可としておいて、少しずつ英語に統一するようにして行ければと思います。(40)
- ・ 発表が英語であれば、質疑応答も英語が当たり前。特に、日本語を理解できない海外からの参加者がその会場にいる場合、日本語で質疑応答したら全く意味がない。(42)
- ・ 生理学会大会の国際化へのステップとして適切な選択である。質疑応答で日本語を許すというのは、英語化による「コミュニケーション不足」という問題点を回避するための現実的解決法として、有意義である。(43)
- ・ シンポジウムの発表は英語がよるしい。討論では、理解など複雑になる可能性があるので日本語でも可能と云うことにしておいては如何でしょうか。(44)
- ・ 理解できる方には良いが、多分殆どの方は、わかっていないのではないか。(47)
- ・ 質問 1 に同じ。訓練なら逆。質疑応答をヘタでも英語で！いきづまったら日本語で。両方行うと言うこと。(48)
- ・ 聴衆のほとんどが日本人であり、無意味。「エー」「アー」という語が入りやすく聞きにくい。ぜひやめてください。(49)
- ・ 質疑応答 + 座長の日本語は続けてください。(51)
- ・ 学会の国際化には重要と思います。(53)
- ・ 原稿棒読み、早口など feedback をかける必要がある。若手の練習にならない。(54)
- ・ 全て日本語に戻すべきである。(56)
- ・ 専門外でも興味ある分野について、英語での発表は理解が難しい。(57)
- ・ へたな英語で発表を聞き、内容を理解することは、非常に疲れる。(59)
- ・ ただ、質疑応答の日本語をきくと、本当に良く分かった気がするので、せっかくの発表のほとんどの内容が無駄になっている気がします。(60)
- ・ 研究をめざす若い人達が英語に慣れてきているのを感じるので、これでよいかと思うが、学部学生には敷居が高くなるかもしれない(特に旧家政分野の人達など)。例外の日本語でよい分野として、今後は社会や文化的な領域へのアピールを含むシンポジウムも考えるべき。(61)
- ・ 例外なしの英語化が望ましい(62)
- ・ 外国人の発表者であれば当然英語であろうが、日本人のみ参加のセッションで、日本人同士が英語で対応しているのは変である。(66)
- ・ 発表者も聞く側も英語に慣れて良いことと思います。(68)
- ・ シンポジウムはオーガナイザーに任せてよいのでは。(69)
- ・ 学会の国際化の点から考えると大事なことはあるが、若手(新規)の学会員を増やす点からはマイナスかもしれない。(73)
- ・ それでよい。必要なものは日本語でいいと思います。(77)
- ・ 教育講演などどちらかといえば、その分野に詳しくないものを対象とする講演は、もっと日本語のものがあっていいと思う。(82)

- ・ これまでも、presentation は日本人であっても、英語でそこそこできていた。問題は、discussion である。IUSP の準備、今後の国際化を計るならば、むしろ discussionこそ、英語で行うべきだ。(83)
- ・ 質疑応答も原則英語にするのがよい。(84)
- ・ 日本語でもよいと思う。(85)
- ・ 外国人の方が英語等で講演するのはよいと思うが、ほとんどが日本人の中で、英語とする意味がない。(89)
- ・ 若い人(?)がどれだけ理解できているか疑問。結局、演者の英語発表の練習に付き合わされている感がある。すごく聞きづらい先生も多い。かといって「うまくなれ」というのも自分を含めて難しい(時間がかかる)。日本語のほうが当然聞く者の理解も 120%になるし、ディスカッションも充実すると思う。試しにシンポジウムを英語と日本語のセッションに分けてみれば?聞きたい内容ならどちらでもいくし、勉強したい門外漢は日本語に行くのでは。(90)
- ・ 発表を英語化なら、質疑応答も英語にすればよいと思う。英語の発表で理解できない人は日本語であれ、英語であれ質問できないと思うので、どうせやるなら統一すればよいと思う。(92)
- ・ 内容を吸収できない。(97)
- ・ シンポジウムにおいて質疑応答も英語で行う。(99)
- ・ シンポジウム導入として利用する人が多い。教育的な意味においては、役割を成さない。(100)

質問 4: 変更点 4 「一般演題のうち、発表者が英語での口演を諾とするものの中から、プログラム委員会が選抜して、英語での一般口演のセッションを実施。ただし、質疑応答は日本語可。」についてのご意見をお聞かせ下さい。

- ・ 口頭発表において、十分な英語力を皆がもっているとは考えにくいです。条件付や発表者本人の了承において英語口頭発表セッションを設けることには賛成です。(1)
- ・ 敢えて、発表者の承諾を得ないでも、プログラム委員会が「英語のセッション」と決めたら、頑張っで英語で発表をtryする。ということではいかがでしょうか。(2)
- ・ 外国人の参加者に積極的に入ってもらうためにも、ディスカッションも英語が望ましいと理想的には思える。(3)
- ・ この場合もスライドには、1 行程度の日本語サマリー(字幕)をいれることを演者に要望してはどうか。(5)
- ・ 質問3と同じ(6)
- ・ 外国人の参加するセッションについては英語口演は当然のことと考えますが、日本人のみのセッションでは支障を生ずることもあり、日本語での口演が望ましいと考えます。(8)
- ・ 他の学会を見ても問題は質疑応答なのでその日本語化はいいと思うが、将来的にはこれも適宜英語が望ましい。(13)
- ・ 発表は準備時間を十分取れるので英語で出来るようトレーニングした方が良いが、質疑応答に英語を強要するとサイエンスの程度が下がってしまう。(14)
- ・ 質疑応答は原則『日本語』。『英語』でも可、としてもよいのでは。(15)
- ・ 質問1, 3と同じ趣旨による。(16)
- ・ これについても発表者に事前に良く周知しておけば問題ありません。群馬大会の場合、文書的な通知がどこにもないままに、「原則は英語」とHPに記載されているだけです。初めて、あるいは久しぶりにこの学会で発表する者には、非常に唐突な印象を与える。前の質問同様、現時点では圧倒的に日本人が多い上に、準備に時間がかかるので、それほど意味があるとは思えません。つまり、このことにより学会が活性化したり、国際化するとは思えません。(20)
- ・ 口演に関しては、英語か日本語に統一した方がよいように思います。(22)
- ・ 生理学会は英語の勉強の場ではないと思います。研究内容の伝達が主な役割ではないでしょうか。また、non-medical の教室からの参加者にとっては、英語の発表は敬遠されるのではないのでしょうか。(24)
- ・ 上記理由による。(25)
- ・ 質問3と同じ理由。すなわち、学会の意義の一つは、自分の専門外の仕事を知って、仕事のヒントにする

ことがあると考えます。これを broken English でやられると、ついていけません。パワーポイントの図表はポスター同様、すべて英文とし、簡単な figure legend をつけることを義務づければ、口演自体は日本語でも可とすべきと考えます。一般口演はシンポジウムより一層専門的な話題となるので、よけいに専門外の人の参加を拒んでいる結果となっているように思われます。(29)

- ・ 英語で一般口演をするのは良いが、練習位してきて欲しい。聞きづらい発表が多すぎる。(31)
- ・ 若い(もしくはキャリアが短い)人から優先的に選ぶと良いと思います。(32)
- ・ 希望者だけならば、そういうセッションあってもよいかと思う。(33)
- ・ 多くの人が英語での発表の体験(訓練)ができたと思う。その趣旨に沿って今後も続けた方がよい。ただ、今回はポスター発表と重なっていたので困った。(34)
- ・ 全て一律英語にすべき(38)
- ・ 学会の最大の目的は情報交換である。それを考えれば、日本語の口演が望ましいことは明らかである。(39)
- ・ 一般口演は全て英語発表にして良いと思います。大学院生や留学前の研究者にとっても英語発表や英語での質疑応答をトレーニングする良い機会だと思います。このような機会があることにより、普段から心構えが変わってくるのではないのでしょうか。(40)
- ・ 全演題を英語にすべきと思います。質疑応答も原則すべて英語が良いと思います。もし、演者と質問者の意志疎通がはかれない場合は、座長が責任をもって、通訳(日本語と英語)等の措置をとれば良いと思います。座長がしっかりとすべきだと思います。今回の前橋の生理学会大会でも会場からの質問が無いにもかかわらず、最初から最後まで全く質問しない情けない座長もいました。(41)
- ・ 発表が英語であれば、質疑応答も英語が当たり前。特に、日本語を理解できない海外からの参加者がその会場にいる場合、日本語で質疑応答したら全く意味がない。(42)
- ・ シンポジウムをオーガナイズできないが、口演で発表したいという若手研究者は多数いると思われる。事実、本大会でもこれを希望する研究者が多数あった。これらの若手が英語で発表する機会をもつことは、生理学学会大会、生理学学会会員の国際化に貢献すると思われる。今回の招待講演者の一人である、Dr. Roger A. Nicoll もこれを、「若手研究者の国際化へのステップ」として高く評価していた。質疑応答で日本語を許すというのは、英語化による「コミュニケーション不足」という問題点を回避するための現実的解決法として意味がある。(43)
- ・ 現時点では、口頭発表の演題数が減る可能性がある。(44)
- ・ 原稿を読むだけではまるで「子供の学芸会」みたいだ。(47)
- ・ O.K. だが、英語も混ぜたらどうか?(48)
- ・ 良いと思います。(53)
- ・ 3と同様。(54)
- ・ 日本語に戻すべき(56)
- ・ 質問3と同じ(57)
- ・ 今回は特に私自身で関係するところがなかったので、意見を持ってない。(61)
- ・ No check が望ましい。(62)
- ・ 英語のセッションだけでなく日本語が認められるセッションがあっても良いと思う。特に理論より技術的なものは、技師、技官、技術補助員など日本語の方が理解がより深く出来ると思うので。(66)
- ・ 英語で発表できる人に限られてしまうので少し残念な面もあるかもしれません。(67)
- ・ ポスターが選択できるので、これでよいのではないか。(69)
- ・ ほとんど英語だが、別に日本語でもいいと思う。外国の人で英語で質問したい人は積極的に質問する人たちだから。(70)
- ・ 一般口演のセレクションの基準がよく分からない。どれが英語セッションでどれが日本語セッションとするのかを明確にして欲しい。(73)
- ・ 英語の一般口演のセッションを実施するということは、異なるテーマの話を 1 つにまとめて話をしてもらうことか、それとも同じテーマの中で最後か最初にまとめてするのか、よく理解できません。前者では反対で

す。英語で話す人はそのまま話させてよいのでは？(76)

- ・ 英語のセッションを実施するなら質疑応答も英語にすべき。(77)
- ・ 英語では、不自由ということで、他の質問で、英語の発表に否定的な意見を多く書いたが、現実的には、英語で発表することも、聞くことも練習する必要があると思うので、英語でのセッションがあってもいいと思う。(82)
- ・ 質疑応答も原則英語にするのがよい。(84)
- ・ 日本語でもよいと思う。(85)
- ・ セッションで分けたほうが良い。(90)
- ・ 日本語での講演と英語での講演を並列させていいのではないか。(91)
- ・ 質問3と同様。(92)
- ・ シンポジウムにおいて質疑応答も英語で行う。練習も兼ねる。(99)

質問 5: 変更点 5 「英語での一般口演のセッションには、外国人の発表演題も公募して、その一部にトラベルアワードを支給。」についてのご意見をお聞かせ下さい。

- ・ 外国人研究者の参加を金銭面でサポートすると、実質的には、発展途上国の恵まれない研究者の援助の色彩が強くなるのではないのでしょうか？むしろ、数は少なくとも、外国からの優れた研究者の招待講演を企画する方が、魅力的だし、参加者も多くなるのではないのでしょうか。(2)
- ・ 海外から進んで日本まで発表しにやってくる外国人研究者はあまりいないように思われる。また、トラベルアワードを支給しても、参加人数の点からあまりコンピティティブにならず質の高い研究の発表も聞けないと思う。海外に出ている若手日本人研究者に自分たちの仕事を日本で発表させる機会を与えることもトラベルアワードの意義に拡大するなら、応募数も多くなり、人材育成の点からも大きな意義があると思う。(3)
- ・ 英語での一般口演セッションは公募し、採否は学会主催者ではなく学会員による決定が必要でしょう。トラベルアワードの経費はかなり大きくなるのが予想されるために、一部の学会員による一部の学会員の為の学会となる可能性があります。(6)
- ・ 国際的な研究の水準を知ることが出来るので良いと思う。(9)
- ・ その一部というのをどういう基準にするか？またトラベルアワードは国内の若手の参加者も望んでいると思うが、なぜ外国人の発表演題のみのそういう制度を設けるのか？(13)
- ・ ただし評議員に多大な寄付を募るような安易な財政策は困る。(14)
- ・ 九州・沖縄や北海道などの遠隔地からの『優秀な若手』研究者への国内発表への一部補助についても考慮されては如何ですか？(15)
- ・ 国際学会でもないのにそこまでする必要があるので疑問に思う。(16)
- ・ 学会センター破綻のツケがどうなっているのかが判断する鍵です。取り返した後ならば「5」ですが、そうでなかったら「1」です(多分、今年度は未だだろうと判断しました)。(19)
- ・ その必要はない。外国人に対して優遇措置を執る必要性などないと思います。(20)
- ・ 経済的に可能であれば望ましい。(25)
- ・ 現時点での中国人等の発表内容の質が、JPS に通らないようなものが多く、トラベルアワードを支給してまでの意義を感じないが、今後このレベルで推移するかどうかは不明。過去3年間に JPS に掲載された(当然 in press を含む)論文の著者であることをトラベルアワード支給の条件にする等の改善方法が望まれます。(29)
- ・ どうやって公募したのか？日本在住の外国人だけか？(31)
- ・ 是非、継続・更なる拡充を希望します。演者紹介時に、座長が受賞口演である旨をはっきり聴衆に告げる(もしくはスライドで表示する)ことを義務づけると良いと思います。(32)
- ・ よいと思います。(38)
- ・ 日本生理学会をアジア生理学会と改名して英語のセッションを増やしトラベルアワードを支給するのなら納得できる。(39)

- ・ 国外からの参加者が増えることは望ましい。折角海外から参加してきた人々が十分に質疑応答に参加できるよう、また、不便な思いをすることの無いよう、今後も主催者側の努力をお願いしたい。(40)
- ・ 英語の口演にトラベルアワードを出すならば、日本語での一般口演参加者にもトラベルアワードを出すようにすべき。特に大会開催時期が通常の3月末だと、航空券の割引等が使えないことが多く、日本からの参加者にも多額の出費が伴うことがある。(42)
- ・ 生理学会大会の停滞状況を打開するために、アジア地区を中心とした外国の研究者の大会への参加を本格的に検討すべき時期に来ている。今回の試みはその意味でも貴重であった。また、英語化の意味を実質化するためにも、今後も継続し、できれば規模を拡大すべきである。(43)
- ・ 外国人に発表の機会を多く与えることには寄与する。(44)
- ・ なんのためにこのようなことをするのか理解できない。(47)
- ・ good！(48)
- ・ 非常に良いと思います。(53)
- ・ もう何年かフォローしてみないと結論を出せない。(61)
- ・ お金はどこから？(62)
- ・ 良い企画だと思います。(68)
- ・ 外国人の学会参加を促すためには必要と思う。(73)
- ・ 特にアジアからの参加にはトラベルアワードを出すのは必要と思います。(76)
- ・ 発表賞をもうけて賞金を出す方がよい。(77)
- ・ 今回発表した外国人のレベルが低かったのは問題であった。(84)
- ・ 外国人といっても全世界にこの制度があると学会側からアピールできるとは思えない。結果、学会に知り合いのいる一部の人がこの制度を利用し、公平性が保てないと思う。トラベルアワードは、シンポジストのみにして、一般口演はしないほうが良いと思う。(92)
- ・ 外国人の発表の英語は当然だが、日本人の発表は、日本語のほうが判りやすい。(95)
- ・ 来たい方には来て頂いてわざわざアワードを支給する必要はないのでは…。それより、国内学生などにも考慮した方が良いと思う。(優秀な発表などについて。(97)
- ・ 一部とはどれくらいの割合なのか、具体的に明記してはどうか。(99)
- ・ 外国人発表者を増やすことは良いと思う。(100)

**質問 6: 大会英語化に伴うデメリットとして、発表内容の理解や意志の疎通が不十分になってしまう可能性のあることがあげられます。これ以外に、どのようなデメリットがあるでしょうか？
(例: 結果として、門戸がせばめられ、参加者数が減少する。)**

- ・ 上述のデメリットが最も大きいと思います。良い解決策が提案できずすみません。(1)
- ・ 仕方のないことですが、ある一定の英語力とその分野の知識がないと、学会で得られる情報量が少なくなってしまう気がします。私も国際学会でいつも感じている点ですが、内容が80%理解でき英語が60%理解できても、全体としては内容を48%(80%×60%)程度しか吸収できていない計算になります。(2)
- ・ 英語で発表することに不慣れな大学院生が、大会を敬遠してしまう危惧があるように思われる。(3)
- ・ 門戸が狭められる。国際化した高度な学術内容であれば多くの実務家の興味を引くものとなる。英語の使用を選ばれた発表だけにしてもよいのではないのでしょうか。(4)
- ・ 結果として、門戸がせばめられ、参加者数が減少する。とくに学部学生や教育専門の大学等の教員にとっては敷居が高くなる。(5)
- ・ 英語に自信が無い研究者が発表を敬遠してしまう。(9)
- ・ 特になし。(10)
- ・ 準備に手間がかかり、発表者が減る可能性がある。(11)
- ・ 日本語でも誤植をしてしまうことはあるが、読み直せば一目で誤植とわかることが多い。しかし、英語では誤植に気づきにくく、通じない発表をしてしまう危険性がある。(11)
- ・ 他の参加者の発表内容が十分理解できなければ、参加する意義はなくなる。(11)

- ・ 医学科以外の方から学会参加を敬遠されるようになっていないか？例えば、看護学科、一部 PHD など。(12)
- ・ 質疑応答が貧弱になってしまう。単に発表したという自己満足に終わり発展性が限られる（これは研究の内容にも依存するが）。一方、外国の研究者からよいコメントをもらえば発展性が出てくる(おもしろい研究であれば)。(13)
- ・ 質疑応答はシンポジウムを含め全て日本語可とすることで特にデメリットはないのでは。(14)
- ・ 多分、「気楽な参加者」が減少すると思います。意志の疏通の低下は、かなり深刻な影響が「徐々に」出てくると思います。「英語発表は当たり前」の雰囲気形成されるまで、大変かと思います。(15)
- ・ 英語化の傾向が強まるならば、今後大会にあまり参加したくない。(16)
- ・ 英語使用は推進せざるをえない。将来は生理学会の東アジア各国との共催も考えるべきか。あるいは、薬理学会との共催にして日本のみの開催を維持する道を選ぶか？(17)
- ・ ……そうですね。(19)
- ・ 現時点ではそのようなデメリットが考えられます。しかし、若者たちの英語や外国人に対するコンプレックスがなくなりつつあるので、英語化そのものは推進しても良いと思います。しかし、それと国際化や学会の活性化は別の問題である。外国人や留学生に対する考え方を変えない限り、何も変わりません。(20)
- ・ 口演の英語化は演者の発表準備に要する時間が増すとされる。(21)
- ・ 最近、省略文字が著増しているように思います。発表者間でも異なっていることも多く、出来ましたら、省略文字の英和キーワード集をプログラム集の巻末にでも掲載して戴ければ、混迷が少なくなるのではないのでしょうか。(22)
- ・ 発表の善し悪しが、英語の発音の善し悪しで判断されるような風潮になってしまう。学会発表はやはり内容で勝負すべき。国内ですばらしい研究をしていても、海外留学経験が無いと肩身の狭い思いをしてしまう危険性がある。(24)
- ・ 長期的には特にデメリットはないと思う。(25)
- ・ 英語化によって、学部生が参加しにくい。(26)
- ・ 英語に不慣れな場合、口演よりもポスターを選ぶので、口演希望者が減少する。(28)
- ・ コメディカルや医学修士の連中に目を向けさせたいなら、大きなネガティブ要因になっています。私の大学のコメディカルの連中は、学会の英語化に反比例して参加しなくなっております。自分の専門外の口演を聞こうとする会員(特に若い人)がどのくらいいらっしゃるのかは知りませんが、私のように、それを大きな参加目的とする者にとっては大きなデメリットであることは事実です。(29)
- ・ 「発表内容の理解や意志の疎通が不十分」だけで十分、日本生理学会の存在意義が問われると思う。今でも、神経関係は神経科学学会との両立に苦しんでいるから、そのうち生理学会から神経関係が出て行くのではないか？(31)
- ・ 例の記載のとおり、参加者数の減少が見込まれます。特に、これから学部学生・高校生・中高教員や生命科学全分野からより多くの人々の参加を促し生理学会を活性化するという見地からは、自殺行為に近いと思います。(32)
- ・ 生理学会の敷居を高くし、日本人初学者や他分野からの参加者が減少してしまうことが懸念される。発表者の英語能力は向上していると思う。しかしながら、大学・大学院入学者のレベルは残念ながら低下傾向であり、大学では多様化(二極化)した学生への対応措置が必要になっている。現状では、英語化は多少無理な背伸びのように感じる。私は、生理学会に限られた(エリート)集団の集まりに閉じることを恐れる。しかし、学会員の国際化・レベルアップを、学会の拡大や医学会・日本社会における理解者増より優先するというのが学会としてのコンセンサスであるならば、ある程度のデメリットには目をつぶるという判断があってもよさそう。(33)
- ・ 全く、例に書いてある通り。若手が萎縮してしまう。学会の醍醐味は質疑応答にあると思うが、若手は質疑する際、知識不足のハンデに加えて、英語の理解力を問われることになり、両方を克服できている一部の若手しか参加する気にならない。実際、私の参加した範囲で若手が質問しているところを全く見なかった。(35)
- ・ 意思の疎通の不十分さのみならず、英語能力の違いによる発表内容の分かりやすさの差異が発表内容

の評価に直結してしまう恐れがある。このような問題は、海外で発表する機会の少ない若手や、研究人口の少ない領域、わが国に独自の研究領域などで発生しやすいのではないかと。(36)

- ・ポスター発表では内容の概要をつかむのに時間がかかる。発表会場でのアブストラクトには和文併記が必要。ただし、事前に配布するアブストラクト冊子は英文単独でよい。(37)
- ・特になし(38)
- ・情報交換の不自由な学会に参加するメリットは少ない。英語での情報交換だったら、海外の学会に行った方が得られる情報ははるかに多い。(39)
- ・英語がそんなに大きな障壁になる研究者は所詮活躍の場がないわけですから、淘汰されて行くのではないのでしょうか？ 参加費の減収は大問題ですが……。英語化のトレンドは他の学会でも同じこと。止む終えない場合には日本語でディスカッションできる余地を残しつつ、論文のみならず口頭発表も英語が基本……という常識をどの学会が先行して定着できるかということではないのでしょうか？(40)
- ・短期的には、「英語の壁」というデメリットがあるかもしれませんが、長期的に見れば無いと思います。(41)
- ・まだ研究発表自体をあまり行ったことのない若手が、口演発表を行う場合に問題があるのではないかと。(42)
- ・今後生理学会大会参加者をコメディカルの方々に拡大することを本格的な方針とする場合は、敷居が高くなり、参加者数が減少する可能性はあるかも知れない。(43)
- ・会場やマイクの設備に問題がある時。反響したり低音高音領域の増幅の差で聞き取り難くなることもある。(44)
- ・一般口演は英語にする必要があるか？若い speaker であり、聞くに堪えない。(45)
- ・私も今後このようなことが続くのであれば、絶対に参加しない。演者にとって、成果を発表する貴重な機会を無駄にしてしまう貴学会の責任は重いと思う。(47)
- ・門戸が狭められ、参加者数が減少することはない。ポスターがある。母国語が疎かになる。(48)
- ・特に問題は起こらないと思います。若い人は特に英語が上手です。(51)
- ・門戸が狭められ、参加者数が減少する可能性あり。(52)
- ・特にデメリットを感じません。(53)
- ・異なる分野で知りたいことがあっても理解が困難になる。(54)
- ・これ以外はすぐには思い浮かばないが、これこそ一番大きな欠点である。(56)
- ・発表者の準備がこれまで以上に大変になってしまう。(58)
- ・学会に参加することが楽しくない。結論として参加が減少する。その結果学会そのものが力を失う。学会がつぶれる。(59)
- ・例の通りです。ポスターで出せばよいですが。(60)
- ・質問3のところに書きました。(61)
- ・発表内容に比べて時間がかかる。(64)
- ・志は良いと思われるが、現状にあっていない。(65)
- ・これから学ぼうとする人々に門戸が狭められるし、広く人々に知らしめるという意味では言語の壁は大きいと思う。(66)
- ・心配されるほど、英語の発表がわかりにくくはないようです。みな英語力が向上しているせいでしょう。(67)
- ・学生さんの活躍の場が減る。英語が苦手な先生にとっては苦痛になる。(68)
- ・結果として、門戸が狭められ、参加者数が減少する以外には特に思いつかない。(69)
- ・Conclusion は日本語併記として発表内容がよく判るようにする。(72)
- ・他にはなし。(73)
- ・研究に英語は必須である。長い目で見れば、デメリットはない。(74)
- ・原稿を棒読みの英語で、発表者も、聴衆にも理解できない発表が生じる可能性あり。(75)
- ・シンポジストの中には少し話すのを躊躇される方がいるのかも知れません。しかし、若い研究者に英語を

勉強しないといけないという意識を持たせるためにはやむをえないでしょう。(76)

- ・ 結果として、門戸が狭められ、参加者数が減少するという可能性はある。しかし、英語化を行う方が長期的にはメリットがあるような気がする。デメリットは、一般社会の人が学会の内容を理解しづらくなる可能性。(77)
- ・ 参加者減少。特に生理学周辺領域の分野の方の参画が減ると思う。(78)
- ・ 発表内容の理解や意思の疎通が不十分になってしまう。これがとても大きい。(80)
- ・ やはり、発表内容が理解しにくい。それゆえ、発表を聞いてもこのまま聞き続けてもどこまで意味があるのかと思うことがある。自分の専門以外の分野は、専門用語の英単語がわからない。生理学会は発表内容の分野が様々である。これは、この学会の、よいのか悪いのか別にして、特徴であると思う。大会には参加したからには、少し異なる分野発表も時間があれば、聞いてみて自分の知識を広げようかと以前は思っていたが、英語化されてから、それがしにくくなった。若い者、留学していない者には、情報収集の場としてはいいかもしれない。(英語の練習の必要性を再認識するにはいいかもしれない)(82)
- ・ 日本語プレゼンテーションが疎かになるが、これは他の学会で補えばよい。(83)
- ・ 質問をしようというときに、言語が壁となって、質問できなくなる可能性が高い。(84)
- ・ 英語は国際学会だけで十分と思う。英語で口演するならば、専門家の指導を受けてするとよい。(85)
- ・ 多少のデメリットがあっても、原著論文は英文なので、会員の発表能力向上につながる！！(87)
- ・ 若手の参加者の減少。議論が上っ面だけになりやすい。準備 etc.に時間がかかる。(89)
- ・ これは、大きなデメリット。たとえば、新しいテーマにシフトさせたい。参考にしたいけど詳しくない分野などのセッションを聞くときは、基礎知識がないので、かなりつらい。英語化の前には、学会が多くの知識・情報をまとめて吸収できるとも良い場だったのに…。完全英語化には無理がる。多くの人(いろんなところで声を聞く)は、英語化に少なからず不満を持っているはず。(90)
- ・ 英語発表の準備に時間が取られる。(91)
- ・ 折角、生理学会として幅広い研究分野の人が集まって発表しているのに、英語が不得意だと他分野の発表が日本語でも苦勞するのに英語だと全く理解できなくなる。それにより、他分野の発表を見たり、聞いたりすることによる、新しい知見が得られなくなり、もしかしたら、自分の研究に応用出来、ブレイクスルー出来るかもしれない可能性がなくなる気がする。(92)
- ・ 若い研究者であるほど我々世代に比して英語に対するアレルギーが少ないと思います。(93)
- ・ シンポジウムが非常に偏ってきていると思われる。英語化でそれが促進されている。(94)
- ・ 参加者数の減少。(96)
- ・ 若い研究者が発表をしなくなっていく。(97)
- ・ 座長の責任が重大である。(99)
- ・ 能力が上がる効果よりも、英語力不足の人を排除する効力の方が大きい。(100)
- ・ 自分の研究分野は英語で十分理解できるが、他分野講演は理解し難い。(101)
- ・ 口演をしたがらない人が増える。発表がわからない。(102)

質問 7: それらのデメリットを解決するためには、英語化を後戻りする以外にはどのような方策があるでしょうか？(例: 大学院生の発表のトレーニングの場として、地方会の充実をはかる。)

- ・ 学会主導にて留学などのプログラムを支援することは重要であると考えます。一定期間以上の留学について経済的バックアップが学会から得られるシステムを構築していただきたいと思います。(1)
- ・ 学会で、大学院生を対象とした「英語での上手な発表法」「英文論文の書き方のコツ」などのテーマでセミナーを組み、研究者以外のゲストスピーカーを呼んで特別講演してもらうのはどうでしょう。(2)
- ・ 学会主導で英語で発表するためのトレーニング講座や講習会を行うとよいと思われる。(3)
- ・ 実務家の抱える問題に答えるために、国際化した高度な学術内容の研究を進める。(4)
- ・ 既に上に記載した。(5)
- ・ 各教室での日常発表、討議を通じて訓練してもらうしかない。(10)

- ・ 英文抄録が事前配布されるなら、これ以上英語化を推進する必要性を感じない。(11)
 - ・ 希望者に通訳の声が聞こえるようにする。でしょうが、コストがかかりますね。(12)
 - ・ 国際的レベルで活躍できる研究者を育成するしかない。海外での学会に積極的に出て行けるトラベルグラントを生理学会でも提供する。また、宣伝活動も活発にする。機会を多く経験すれば、英語の発表、討議になれるのは早い。地方会まで一気に英語化すると参加者が減るのではという危惧を抱く。(13)
 - ・ 例のような意見を良く聞くが、地方会でなくても本大会でも大学院生にトレーニングさせて全然問題ないと思う。(14)
 - ・ 各大学で、英語発表をサポートする専門職を養成する。(15)
 - ・ 全国の人が集まり、自由に議論できるから意義があるのであって、例に挙げるような地方会では余り意味がない。(16)
 - ・ 将来は生理学会の東アジア各国との共催も考えるべきか。あるいは、薬理学会との共催にして日本のみを開催を維持する道を選ぶか？(17)
 - ・ 取り敢えず「部分的に英語」から始める、というのはどうでしょう。例として(19)
- | | |
|------|----------------------|
| イントロ | 英語 |
| 実験結果 | 日本語(図は英語だから外人にも判るはず) |
| まとめ | 英語 |
- ・ 大学院のゼミや授業、研究打ち合わせなどをすべて英語でやるようにするのが、一つの方法。外国人の教官をもっと増やす。欧米だけでなく、アジアからも。(20)
 - ・ 英語論文の投稿と同様、国内学会での口演も英語化の時代であると認識し、各々が英語で話す・聴く能力を高める(ように努める)。口演の英語がまずくても内容が理解できるよう、提示スライドを分かりやすいものにする。(21)
 - ・ 前述。(22)
 - ・ 各教室単位に啓蒙して、出来るだけ英語になれる機会を作って頂く。(23)
 - ・ 日本語との両立、英語発表に触れる機会を多くする。(26)
 - ・ 各スライドのタイトルを日本語と併記にする。(27)
 - ・ 地方会でも英語での発表を可とする。(28)
 - ・ 上述したように、口演自体は日本語であっても、パワーポイントの図表はすべて英語とし、これを追うことで口演内容がわかるように英語の説明も加えたものとするような工夫を充実すれば、それは後戻りではないと考えます。英語か日本語かという二者択一的な考え方に問題があると考え次第です。(29)
 - ・ いまや、生理学会大会が「大学院生の発表のトレーニングの場」と化している。大会に演題は出しても他の人に任せて、大御所は大会に来ていないのが現状である。(31)
 - ・ 英語口演を行った者の参加費を減免する、又は賞をどんどん与える、英語発表添削などのサービスを行う、などの方策があると思います。又、学部学生や大学院生の発表については、日本語での発表を認めるべきですし、英語で行われる講演・シンポジウムについてもその人たちがわかるように、図表やまとめに日本語の表記を加えるようにすべきだと思います。東京談話会は地方会になっていないと思います。(32)
 - ・ 現状では、地方会は規模が小さすぎて、同分野の参加者の数が限られ、学問的な交流の場としての有用性は限られているような印象がある。(33)
 - ・ プレゼンテーションのスキル(英語での発表力を含めて)が向上するような活動を学会としてする。セミナーをやる、本を出す、抄録集に提案を加える。(34)
 - ・ 大学の講義を英語ですべきである。それをせずして、学会だけを英語化して何の意味があるのかわからない。(35)
 - ・ 英語発表のサポート体制を強化する必要がある。例えば、1. Abstract の submission 時に、英語による原稿作成の支援体制を強化する、2. 希望があれば、学会前に、(できれば native speaker による)英語発表のトレーニングを行う場を全国に幾つか設置する、3. 発表原稿を学会でチェックし、それを native speaker が音読して MPEG ファイルなどとして発表者に返送する、などのより直接的なフィードバックが有

効ではないだろうか。(36)

- ・ 発表会場でのアブストラクトには和文併記が必要。ただし、事前に配布するアブストラクト冊子は英文単独でよい。(37)
- ・ 英語発表のコツを希望者に伝授。具体例がないとわからないので、発表を具体的に直す課程を見せる。(38)
- ・ 地方会の活性レベルは地区ごとにより差があるようですが、地方会を大学院生のトレーニングの場として英語化推進に活用することには賛成です。(40)
- ・ 各地方会で、大学院生等を対象にした英語でのプレゼンテーションの講習会を行う。講師には英語を母国語とする留学生や英語が堪能な日本人会員をあてる。(41)
- ・ 日本語の一般口演は大会でも残すべき。(42)
- ・ 地方会の充実！日々の Lab での英語の speech の training が進めば、一般口演の英語化を再検討。(45)
- ・ 併記するのは絶対に必要。留学を経験できる大学関係者にはいいのかもしれませんが、私には困ります。(47)
- ・ 自由度(1:3 で英:日など)(48)
- ・ 地方会でのトレーニングは重要と思います。(51)
- ・ 質疑変則英語としたほうが良い。中途半端。(52)
- ・ ミススペル、口演の評価などを行う。(54)
- ・ 環境生理プレコングレスのようなシステムにする。(55)
- ・ なし。英語化を日本語化するには何の後戻りでもない。(56)
- ・ 思いつかない。日本語での発表機会は残しておくべきだと思いますが。(58)
- ・ 基礎分野では英語でのコミュニケーションが必須ですから勉強をすればよいのだと思いますが、シンポジウムなどは簡単なレジメを作っただけであれば分野外の人間にも分かりやすいと思います。最後のスライドだけ日本語のまとめをつけるなど。(60)
- ・ ポスターセッションをもっと充実させる。例えば一枚のポスターをもう少し大きなスペースとしたり、そこでのディスカッションをもっと可能になるような時間配分を考える。(61)
- ・ 英語をきちんと話せる人が英語を選抜させる。(64)
- ・ 即席的なことは困難。他の学会とともに国に対して諸外国のように英語を第二国語として教育していくように強く求め、早期実現を目指していく。(65)
- ・ 地方会の充実は重要と思います。(67)
- ・ 大学院生の発表のトレーニングの場として、地方会の充実を図る。(68)
- ・ ポスター発表においては、日本語、英語でのサマリーをつけるようにし、図は英語のみで良いと思う。(70)
- ・ 日本語で聞ける教育講演を充実させる。(71)
- ・ 英語で発表するための講習会を学会中に開催する(presentation の方法の講習会にしてもよいでしょう)。(72)
- ・ 地方会での口頭発表を充実する。(74)
- ・ 英語での発表原稿のチェックや、発音の適正化のための担当を生理学会内に持っては？(生理学会の何%が留学経験者かを知ってほしい)(75)
- ・ たしかに口演発表は若い人にとって重要なトレーニングであると思います。米国の Neuroscience Meeting では、Symposium の他に口演発表もありますので、そのセッションを設け、日本語発表も可能とすることも一つかと思えます。(76)
- ・ 特にないと思う。個々の資質次第の部分が多いため。ただし、英語発表の機会を地方会の充実でおぎなうことは一案だと思う。(77)
- ・ 地方会の充実をはかる。これが大切と思う。(79)
- ・ せめて教育講演だけでも日本語にしていだきたいというのが正直なところ。日本語の抄録を用意し、大

体の内容が先にある程度、容易にわかるようにしてもらえると少しは助かると思う。英語化にするのであれば、結局、本人の努力で不自由のないようにするしかないような気がします…。それに対して学会として何かをあえてしようとするのであれば、教材、辞書などを作成することも検討してもいいかもしれない。(82)

- ・ 地方会の充実をはかる。(83)
- ・ 演題に2名程度若手の指定対論者を決めておく。(84)
- ・ 地方会の充実をはかることは効果的だと思います。その地方会開催の知らせを演題募集を含め積極的に行うようにしてほしい。(地方会の抄録も英語化するのも一案と思います)(86)
- ・ Abstract末に3~5語のkey wordsを記述するようにすれば、理解・意思の疎通は少しは防ぐことができるのでは?(88)
- ・ セッションを分ける。10年以上米国にラボを持っている人でも、英語ばかりは疲れるらしいので、まして、私たちが日本語で生活している人間が疲れないはずがない。日本語と英語のセッションを専門テーマでも分ける。発表のトレーニングの場、経験としては悪くはないが、毎回同じ人間が話すわけでもなく、練習になるとも思えない。(90)
- ・ せめて、ポスター発表では、英語と日本語の併用にしてほしい。国際化と数年前からいっているが、実際、参加している外国人は1割にも満たない気がする。それならば、日本人同士気軽に発表出来、意見交換しやすいような環境も作っておいて方が良くと思う。(92)
- ・ 地方会の一部に同様の試みを入れてはいかがでしょうか。(93)
- ・ 地方会では、充実した質疑応答ができない。専門がずれると十分な討論ができないのが現状。これからも、困難であると思う。地方会は発表のみが意味を持っているようであると思われる。
- ・ 英語と日本語を混ぜる。(95)
- ・ スライド(パワーポイント)の作り方を工夫するように(理解しやすいものにする)、奨励例を学会が提示する。こういうことは英語化に拘わらず、プレゼンテーションのスキルアップに大きく貢献する。(96)
- ・ 各大会で、英語でのプレゼンテーションについての講習を行う。(99)
- ・ 実際の外国人の前で発表する場を増やす。(100)

質問 8: 英語化は、大会の国際化を通して、大会・学会の発展をはかることを目的としています。大会の国際化のために、英語化以外にどのようなことを行えばよいでしょうか?(例: 海外からの参加者のためのトラベルグラントをさらに拡張する。)

- ・ 生理学での韓国のレベルが良くわからないのですが、日韓で共催として生理学会(あるいは生理学会のサテライト学会)を隔年で日本、韓国で開催する。準備から発表まで英語で行わざるを得ないので英語化にはうってつけではないか。韓国での開催なら、日本とほとんど旅費や滞在費は変わらないのでは?(2)
- ・ 外国からの参加者がアクセスしやすい成田や中部国際空港や関空に近隣の開催地を中心に大会を開催すると良いと思われる。(3)
- ・ 実務家の抱える問題に答えるために、国際化した高度な学術内容の研究を進める。(4)
- ・ 日本人同士が英語で発表、討論するのはやりにくいから、絶対に英語で発表しなければいけない他国との共同開催を計る。以前、日英合同大会があったが、この場合は相手の母国語が英語なので、言語上では差が大きすぎた。お互い母国語が英語でないとやりやすい。例えばドイツなら、英語はかなり上手だが、やはり母国語の人とは違う。現実的には近隣の国との共同開催がやりやすいのではないかと。(5)
- ・ 参加費のクレジットカード払い。(7)
- ・ 一般演題での参加には限界があるかと思います。可能であれば招待講演やシンポジウムへ参加していただくのが望ましいとは思いますが、予算面の問題もあり難しいところかと思っています。(8)
- ・ 演題選択を行わない限り、国際化にとり残されてしまう。(10)
- ・ 国内学会を無理に国際化しようとする自体に賛成できない。学会の国際化と会員の国際化とは別のことである。サッカーの話を例に出すのは少々筋違いかもしれないが、イングランドやイタリアは優秀な外

国人選手が活躍する世界最高峰の国内リーグを持つが、ワールドカップの優勝からは遠ざかっており、スペインはまだ優勝したことがない。優勝回数トップのブラジルは上記ヨーロッパ諸国に人材を送り込んでいる。日本生理学会は大会の国際化よりも、国内の会員のサポートをしっかり行い、国際的に通用する人材の育成に必要な事業を展開してもらいたい。(11)

- ・ 国際化にはやはり、英語化が必須だと思います。多少困難がありますが、ある程度のコストをかけてでも英語化は必要。英語化以外となると、その時代のトピック、ノーベル賞受賞者講演、話題の人物を呼び、この講演情報を近隣諸国に流し、その近隣諸国からの参加者を増やす努力を続けるのはどうでしょうか。(12)
- ・ 生理学会会員が海外の共同研究者あるいは同じ分野の研究者の参加を促す努力が必要。組織と個人の両方からの宣伝・勧誘活動が必要である。(13)
- ・ 日本から良い研究がどんどん発表される事に尽きる。(14)
- ・ 日本生理学会を海外で、近隣のアジア諸国とタイアップの形として開催する(1/4年位で)。(15)
- ・ 海外に目を向ける前に、どのようにしたら国内の人たちが喜んで参加したいと思うか先ず考えるべきではないか。その一つとして、教育セミナーのようなものを充実させると言うこともいいのではないかと思う。(16)
- ・ 招聘海外研究者を増やし、シンポジウムのレベルアップをはかる。(17)
- ・ やはり、研究内容の充実(他領域とのコラボなども含む)だと思います。小細工は効かないと思います。外人が日本語のロボット系などの論文を、必死になって読んでいた話を二三聞いたことがあります。(19)
- ・ そもそも国際化することによって、どのような発展が予想され、それがどのようなメリットにつながるのかが不明瞭。国際化と言うことは、世界の様々な国々の背景にある文化を十分に理解し、グローバル・スタンダードに従うと言うことだと考えます。英語化はその一部に過ぎない。日本人は特別な民族だと考えている限りは、国際化はあり得ません。(20)
- ・ 国外からの参加者を増やす点では、学術的な視点でなくて恐縮ながら、学会開催地を国外からアクセスのしやすい大都市、あるいは国際的に有名な観光地を近くに擁する都市にする。(そうすると国際的知名度の低い地方都市での開催は難しくなる・・・)(21)
- ・ アジア・オセアニア生理学会との共催なども如何でしょうか。(22)
- ・ 著名な外国人スピーカーをもう少し呼ぶ。その場合、異なった分野ではなく、似た分野のスピーカーを招待して、シンポジウム形式で行う。(23)
- ・ 国際交流を盛んにする。様々なグラントがあるのでそれを利用すれば良い。(25)
- ・ 参加費を段階的に設定する。(28)
- ・ アジアの国際学会もある中で、国際化、それも例題のように餌で釣って外国人の参加を増やすことで国内大会が発展するという考え方自体がおかしいと思います。国内の参加者により魅力あるものとし、発展させて行くことで、自ずと外国からの参加も増えると思います。トラベルグラントを出す金銭的余裕があるのなら、もっとみんなが話を聞きたい一流の研究者を招待して、口演していただく方にまわすべきだと思います。また、日本生理学会が主催する国際学会を別に作るというような考え方は無いのでしょうか？(29)
- ・ 方法は分からないが、今、大会は生理学会は「大学院生の発表のトレーニングの場」と化し、ディスカッションする場ではなくなってしまっており、「日本生理学会」は存続の意義が問われている。(31)
- ・ 日韓シンポジウムのみならず、アジア・オセアニアの生理学会との共同シンポジウムを行う、という手もありますが、海外からの参加者を増やすためにも学会そのものの内容をもっと魅力的にすべきだと思います。私共も努力しないとイケません。(32)
- ・ なぜ、日本の学会を国際化しなければいけないのか理解できない。国際学会は国際学会である。例えば、我々が中国の生理学会に英語化されたからといって参加したいと思うだろうか。その国の学会はその国の言葉でやり、その国のその分野(生理学界であれば生理学)の横のつながりを強くし、若手を育て、国としての底上げをすることが目的であるべきである。(35)
- ・ ウェブ会議の導入(経費面の解決が大変かもしれませんが)：シンポジウム、各種の講演に海外から招待する場合、地理的・経済的問題が大きな障壁となっている。そこで中国、韓国などアジアの近隣諸国(あるいは可能ならば欧米諸国も含め)の学会の協力を得て、現地にこの設備をもつ会場を確保し、現地スピーカーと現地参加者を募る。経費については、渡航費宿泊費など不要になった分を現地学会に補助

- 金として出す。シンポジウムオーガナイザーのうち一人以上は、できるだけ海外の研究者とする。(36)
- ・ 技術トレーニングコースの実施。(37)
 - ・ アジア等の学会と共催する。(38)
 - ・ 日本生理学会はその名の通り日本の生理学会であって、それを国際化するというのは論理的に矛盾している。アジア生理学会と改名するしかないでしょう。(39)
 - ・ トラベルグラント以外の学会参加の魅力といえば、魅力的なシンポジウムやセッションが英語で行われていることでしょう。その他、海外からの参加者のストレスを軽減するためには宿泊施設や交通手段において英語が通じるようにとの配慮も重要では。今回もホテルで英語が通じず困っている国外参加者を助けたことがありました。(40)
 - ・ 海外の生理学会との joint meeting を行う。(41)
 - ・ アジア地区の研究者の参加を促進するための、より組織的な取り組みを行う。2009 年 IUPS をその契機とする努力が望まれる。(43)
 - ・ 日本の生理学研究現況、学会開催を、Web などで海外へ常に宣伝(英語で)する。(44)
 - ・ 海外への advertisement、JPS の level up(45)
 - ・ 何故、学術大会が国際化に発展しないといけないのか理解できない。学会誌(英語論文)を通じて、研究内容、学会のイギを宣伝すればよいただけのことではないか。(47)
 - ・ アジア? 中国語韓国語の併用ポスター。(48)
 - ・ トラベルグラントを 100 名程度まで広げる事ができれば、中韓を中心に参加者が増えるのではないのでしょうか。(51)
 - ・ 海外からの参加者のためにトラベルグラントをさらに拡張することは不賛成。(52)
 - ・ 海外からでも参加したいと思わせる内容にするのが重要と思います。特にシンポジウムの充実と特別講演に関しては、海外からの研究者も良いのですが、コストがかかるのであれば、国内の他のフィールドで活躍する人を呼ぶのが良いと思います。(53)
 - ・ ホームページの充実と、外国の関連HPとのリンクを進める。(55)
 - ・ 日本生理学会をこれまで以上に国際化するメリットが、はっきりわからないのですが…。各分野での国際学会が多数ありますから。(58)
 - ・ FAOPS や近隣各国の生理学会との連携。(67)
 - ・ 海外からの参加者のためのトラベルグラントをさらに拡張する。(68)
 - ・ 回答例の逆の例を増加させる。すなわち、次回大会主催者、前回大会開催者数名ずつに対し、海外国際学会発表や共催を経験してもらい、そのフィードバックを生かす。(70)
 - ・ 積極的に海外に大会を宣伝するとともにトラベルグラントを拡張する。(71)
 - ・ トラベルグラントは賛成です。(72)
 - ・ 学会HPの充実。外国人シンポジストを増やす。(73)
 - ・ 今の研究会は海外からの参加に対してあまり多くの賞金を提供していないようです。日本での研究してみたいと思う外国人が増えるためにはトラベルグラントを拡張する必要があります。(76)
 - ・ 海外からの参加者のためのトラベルグラントをさらに拡張する。賛成。(77)
 - ・ わからない(80)
 - ・ もっと海外に宣伝をする(学会名に「日本」がついているとどこまで海外の方が参加するか不明であるが)。英語で発表を行っていることを宣伝する。世界的に有名な先生方の発表を強調して宣伝する。(82)
 - ・ 大会ボランティアの養成。(83)
 - ・ 海外からの若い active なシンポジストを増やし、この人たちと日本の若手が自由に英語で話せるような場を設ける。(84)
 - ・ 日本で発表するメリットをアピールする。(85)
 - ・ どんなにがんばっても、SiN のようになれるわけでもなく。規模は小さくても深くディスカッションできる場の方がどれだけ日本の科学発展にとって有益かが判っていない。(90)
 - ・ 各国大学などに大会の演題募集のポスターを送付して貼ってもらう。(92)

- ・ 英語のホームページを充実、海外への姉妹サイトにリンクさせる。(93)
- ・ ホームページをリンクさせ宣伝する。(96)
- ・ 他の国でトラベルグランドなどしてるのですか？まずは、国内の学会の質を国内で上げていけば良いと思う。(97)
- ・ 著名な先生方へ大会のCMをお願いする。(99)
- ・ 外国人とのミーティングの場を設ける。英語の教育目的としたセッションを設ける。(100)

質問 9: 学会、大会の活性化と発展のためのお考えをご自由に記述下さい。(例: やみくもに会員数を増やせばよいというわけではない。)

- ・ やはり、生化学学会など他の学会との合同開催の時のほうが学会は盛会となるのではないのでしょうか。開催地はできるだけ大都市としてアクセスがいいほうが助かります。生理学の学会参加者なら、あたりの観光を目的の人は多くないような印象があります。それと、これは理想論ですが、学会誌が high impact journal になれば自然と活性化する気がします。Genes to Cells の生理版は難しいのでしょうか？(2)
- ・ 海外の研究機関にポストに出ている多くの若手日本人研究者をひきつけるような取り組みをしていただきたい。たとえば、国内でポストを見つけるきっかけ作りとなるような特別な場を学会が提供していただくなど。(3)
- ・ 質問8への回答に同じ。(5)
- ・ 大会の国際化とはどのようなことを目的としているのでしょうか？もし日本を生理学の中心とするためであれば、地理学的に不経済であり、意味のないことです。国際化に意味があるとしたら、東アジアで学問的な発達に不十分な国々を助けることしか考えられません。学会の英語化はその目的を明確にしておかないと、著名な研究者を呼び寄せ自らの研究に利する場として学会が利用されるだけに終わってしまう可能性が高くなります。(6)
- ・ 以前薬理学会とジョイントをした際に、参加人数に加えて共通の興味を持たれている方々とより多くのディスカッションの機会が持てました。このような企画は今後も可能であればと思います。(8)
- ・ とにかく発表の質を上げることしかない。そのためには、演題選択を厳しくしてゆくこと。一時期は応募者が減ると思われるが、これを切り抜けない限り国際化はむりである。(10)
- ・ 国際的に有能な研究者を育成するためには、(1)初等・中等教育、(2)学部・大学院での専門教育、(3)研究環境と発表の機会が必要で、それぞれに対するサポートをしっかりと行うことだと思う。(1) 初等・中等教育における「生理学教育」に対する提言を行う。(2) 解剖学の領域とは異なり、生理学の領域には新しい現象の発見や概念が次々と生まれるため、「生理学用語集」を web 上に掲載して学会のトップページにリンクするとともに、内容を年に1回程度以上更新する。なお、サイエンストピックスは良い企画である。医学部の生理学講座が減少しつつあるため、「生理学の歴史」も web 上に掲載すると良いと思う。(3) 大会は参加するための「敷居」を低く保ち、発表しやすい大会を運営する。発表者が語学力よりも発表内容に集中できるようにするため国内学会である日本生理学会の国際化には歯止めをかける。一方で、IUPS や FAOPS など国際学会組織の充実や国際学会参加へのサポートを積極的に行う。(11)
- ・ 初等・中等教育を「根」、各研究室を「枝」、研究成果を「葉」、人材を「実」に例えれば、日本生理学会は「幹」であっていただきたい。(11)
- ・ 生理学会は、NO 学会・Dahl rat 学会などのようにテーマを絞った学会ではない。その分、話題性による参加者牽引力は低いですが、同時に時代によって変遷テーマの波に巻き込まれない。逆に言うと、その時代の興味に見合ったテーマを設けることで、参加者の吸引力が出せる。この点から、その時代のトピックを牽引する中心人物を講演者に呼ぶ、という考えですが、既に行われていますね。問題は毎年そのようなトピックとそれを牽引する人物が現れない、ということでしょうか。しかし、毎年、ノーベル生理学賞、ラスカー賞、などが選出されてる訳ですから、1~2年遅れでもこういう方々をお呼びするのは一案でないでしょうか。単発の論文的研究発表も重要ですが、最近の嗜好傾向は、まとまった研究ストーリーを聞いてその分野のガイドラインを勉強して、自分の研究室に帰りその新しい情報を何か(自分の研究分野や教育内容)に利用する、という方向にあるのではないですか。こういう点から、十分なシンポジウム(一人30分位で5人くらい、質疑応答を入れて、合計3時間

位)を中心に学会を運営するのはどうでしょうか。確か、2001年に京都で行われた生理学会がそのパターンを採り、評判が良かったと思います。シンポジウム・テーマは広げすぎないようにし、シンポジウムした限りはそのテーマでは充分議論してもらおう、というやりの方が、参加者が増えると思います。単発論文の口頭発表は、かなりテーマを絞って、反論が渦巻いている時代のトピックを3つくらい取り上げ、1日に1つずつ熱く議論してもらおう、というのが参加者が集まると思います。そのためには、大会主催者がどういう点が議論的になっているか、誰がその理論や説の中心人物であるか、などをアピールする宣伝する文章を發表する必要があります。以前、シドニーで、ネットワーク説とペースメーカー説をテーマに小さな学会が構成されたことがありましたが、会場は大変な熱気でした。(12)

- ・ 現在も周辺学会に参加するときに1st circularを配っているが、周辺学会への宣伝、勧誘活動が国際的レベルで必要である。HPの充実はいまでもない。学会の企画・中身がやはり重要で社会が関心を持つ企画の提案が必要である。また、最先端の技術紹介などもおもしろいと思う。さらに、大高連携ということがいわれているように、将来の生理学者を育てるために高校生を対象とした取り組みも続けるべきである(若手の会が行ったことがある)。(13)
- ・ ホームページの最近の充実ぶりのような、広報活動が重要。(14)
- ・ 生化学や臨床医学などの分野の人材を吸収する。シンポジウムや口頭発表で、『生理学らしくない』発表も積極的に受け入れ、聴講する。(15)
- ・ 植物機能研究の分野では、シンポジストとしての招待などを通して、他の分野(例えば、生化学や細胞生物学、内分泌学、その他の臨床医学分野など)の一流研究者にもっと参加してもらおう。例えば毎大会、30人ぐらいはこのようにして招待講演者になってもらう。国内の研究者なら、交通費のみで参加をOKしてもらえと思う。(17)
- ・ 一般演題の多くを口演にすべきだと思います。時間的问题がありますから、その分、シンポジウムを厳選すべきだと考えます。(18)
- ・ 他用があり、手短かに私見を述べます。生理学(会)は医学系が中心となってきたが、近年の医学系の生理学教育が抱えている問題+少子化のように状況は変わっているので、従来の感覚で運営する限り、発展には自ずと限界が出てくると思う。そこで、「他学会や他領域、または若手のリクルート(工学系、生物系、小-中-高校生)」を提案したい。例えば、生体インプラントの素材研究(工学、化学など)にも(生物学や)生理学的センスは必要なので、異領域の方に講演を願えば、共同研究が生まれる機会も増え、その様な研究には研究費も付きやすいことが想像されるので、生理学ルネッサンスが期待できる。また、小-中-高校生も、保健体育や生物(理科)等で体と心の仕組みを勉強しているのだから、何かしら生理学の発展と関係すると思う。突飛な考えかもしれないが、「保健体育+生物(理科)->生理学」という形で生理学を学校で実施できれば、現場の先生も生徒も負担が減り、生理学を盛り上げていく次代の人材育成に直結すると思う。以上、乱暴な文面で失礼致します。(19)
- ・ 生理学雑誌68巻1号に小泉周氏が「Vision」で書いておられた最後のポイント、医学部出身者による運営や発想が主体だと言うことを強く感じます。特に私は理学部出身で歯学部にも長い間おり、また、理学部に戻った者ですが、歯学部時代にもこのことを強く感じていました。現在医学部や歯学部から他学部出身者が減少しつつあると思います。学会がこれまで通り、医学部出身者を中心に発展をお考えでしたら何も言うことは有りませんが、医学部外の会員を取り込もうとお考えでしたら、このあたりの発想から変える必要があると思います。例えば、理学部出身者にも科研費がもっと当たるようにするとかです。しかし、一方で、「神経科学会」などどのように差別化を図るかも重要な課題だと思います。(20)
- ・ 新しい研究分野の参入が自由に出来る、という学会の雰囲気作りが大切のように思います。又、学生や若手研究者が参加しやすいような体制づくりとして、学会費や参加費の大幅な軽減、学会会場選び、ディスプレイの設定等、如何でしょうか。(22)
- ・ 毎年の年会毎に、もう少しはっきりとした主題を掲げて、それに対する複数のシンポジウムや口頭一般発表、ワークショップなどを企画する。例えば、今年は「心臓生理」、来年は「感覚器」、その次は「腎臓機能とその疾患」など。(23)
- ・ 今回、国際化ということで英語化が図られましたが、学部生にとっては内容を理解することが難しく苦勞し

ました。勉強になるためにも英語化、日本語化の両立が必要と考えますので、ご検討していただきたいと思います。また、学部生の勉強のために、教育講演を学部生向けの内容にできないでしょうか。また、生理学に精進する方々の情報交換だけの場ではなく、これから未来を目指す学生に“生理学”という学問を知ってもらう学会にしていくのはどうでしょうか。(26)

- ・ JJP(JPS)の評価を高める。そのためには、会員が率先して優れた論文を発表すると同時に、まず生理学学会における評価をもっと高くする。生理学学会自体で高く評価しなくてどうして海外から高く評価されることが期待できるか。例えば、今回の生理学学会でも、奨励賞の紹介で、「Nature に発表された仕事」を高く評価するような紹介があったが、そうではなく、JJP に優れた論文を発表した研究者を高く評価すべきではないのか。(27)
- ・ 日本国内の移動に交通費がかかるので、大会の国際化のためには国際空港に近い都市で開催せざるを得ない。(28)
- ・ 中国人などの外国人ばかりを見ず、もっと、国内の医学科を中心とした大学教員以外に広く門戸を開き、参加しやすい環境づくりの方に目を向けるべきです。また、最近急増している医学科修士学生もターゲットとすべきです。地方会はレベルが低すぎる上、地域によっては専門内容に偏りが顕著で、こういった連中にも魅力があまりあるものではありません。面白いネタは必ず本会に再登場するようですし、これを禁止すれば、いよいよ地方会のテーマが貧弱になるばかりです。トラベルグラントはこういった連中にこそ出すべきと考えます。(29)
- ・ なんでも自由に話せる雰囲気づくりが大切である。少なくとも英語化はそれに反していると思う。(31)
- ・ 国際化も大切ですが、その前に国内の生理学関連分野の人が広く集まることのできる場にする必要があると思います。現在の英語化は、単に現在参加している会員のレベルを変えることに主眼があり、(今回もポスターにあった)「生命の理に興味を持つ人」を集められない体質の変革には寄与できないでしょう。生命科学全分野からの参加を促す方策を考える、さらに学部学生のみならず中学高校生および教員の参加を積極的に推し進める(トラベルグラントや賞など)方策も取る必要があるのでは。そもそも、日本医学会に所属する学会だからといって、アンケートのように質問 10 医学部の生理とその他の学部を分ける必要があるのでしょうか？生理学が「生命の理」を学ぶ学問であることを標榜するならば、生命科学系全ての学部・学科に生理学は必要ではないでしょうか。その意味で生理学はもっと(political ではなく Scientific に)生命科学系全体に拡充する必要があります。このように「医学部」にいつまでもこだわっていると、他学部・学科系から「生理学」は医学部のもので、自分たちには必要が全くないという誤解を与えていると思います。質問 10 は、その意味で別の尋ね方をすべきでした。(32)
- ・ 学会の会員動向を示したグラフを見たが、学会員は減少傾向にある。また「生理学教育と研究における問題と提言」に記載されているように生理学教員の削減も進行している。言うべきことを主張し、提言を行うことや、各大学での教員の生理学教室の規模維持のためにはたつきは重要であろう。一方、学会の会員動向グラフは会員の過半数が医歯系以外であることも示していた。生理学をどのような人たちの集まりにすることが望ましいのであろうか？高レベルの医歯系専門化集団を望むのか、広さを求めるかの判断は重要であろう。生理学は決してとっつきやすい学問ではない。教育の底が低下し、学問においても即有用な実用性重視の社会的流れの中で、(あえて突き放したひどい言い方をすれば)生理学者は理屈っぽくはっきりしたことを言わないおたく人間と見られかねず、敷居が高めな生理学に参入しようとする学生を増やし、学会の縮小傾向を反転させることはたやすいことではない。少数精鋭主義ならば、学会の縮小や英語化に対する懸念には目をつぶってもよいように思う。しかし、もし学会を大きくすることが重要であるならば、学会をより敷居の低い気軽な雰囲気の会にし、医歯系以外の参加者増のための努力等も検討すべきかもしれない。また大会の英語化は、現状では学会規模の拡大のためには結構重い足かせになっているような気がする。(33)
- ・ 医学部所以外の所属、医師以外のバックグラウンドを持つ参加者が、増えていると思います。具体的な案はありませんが、この様な方が参加しやすい雰囲気を作っていくことが大事だと思います。(34)
- ・ もっと、会費、参加費を安くする。(35)
- ・ 生理学が生命科学に対して最も影響力のある研究を世に送り出してきたのは、どちらかというと19世紀

末から20世紀後半までであるという印象が強い。言い換えれば、21世紀の生命科学の潮流からみると、生理学の輪郭自体が極めて'old-fashioned'になりつつあるといえる。これには、単に多くの生理学の分野において研究手法そのものの新規さが失われつつあるだけでなく、新しいコンセプトやパラダイムの提示方法そのものが他の生命科学分野の研究者にとって理解しにくかつ取り入れにくいというマイナス面が大きく作用していると思われる。この問題の解決策を見つけるのは容易ではないが、これから進むべき方向として少なくとも以下のことが重要であると思う。(ア) 新しい生理学的研究手法開発の奨励: 特に、工学分野、IT分野との密接な連携が即時的な効果を生むと思われる。現在既に小さなスケールで同様の試みが行われているが、学会全体の戦略として、若手へのサポート体制を整備し積極的に推進していくべきではないか。工学、IT分野の研究者も、新しく開発した技術や得られた知識を広く応用できる分野を求めているからである。(イ) 生理学会の再編: 学会の古い歴史を考えると、現在の学会を中核として再編を進めていくのが望ましいかもしれないが、幾つかの分科会(すでに存在する研究グループとは独立に)を設けてそれぞれの再編を進めていくほうが実情にあっているかもしれない。この場合、生理学会は、分科会の緩やかな連合体として機能することになり、このための規約の整備などを徐々に行っていく必要がある。(ウ) 生命科学への貢献に関する広報活動の強化: 生理学研究なしに生命科学全般の進歩がありえない根拠はなにか、生理学によって人間社会にもたらされる利益とは何かなどについて、明快で分かりやすい説明を、サイエンスライターなどのメディアのプロと協力することにより、常に学会全体から発信していく必要がある。同時に、一般社会からのフィードバックを常に得られるような体制を整え、これによって学会の新しい方向性を探っていく必要性もある。「ユーザーズサイエンス」といった視点も重要である。

- ・ 学会の国際化:これは IUPS2009 に向けて既に行われつつあることなので、再確認をすることに留めたい。(36)
- ・ どうしても、閉鎖的な印象を受けてしまうので、なるべく、他の学会との連携を深めるべきと考える。(37)
- ・ 生理学は測定技術の集大成でもあるので、現在も取り組まれているような実験技術に関する情報交換等が、今後も継続されると、学会の特徴と魅力の中心的柱となると思われる。(38)
- ・ 生理学会の歴史を見ると、新しい分野が立ち上がったときに生理学会から抜けていったケースが多いように思われる。生理学の伝統に固執しすぎなのでは、とってしまう。(39)
- ・ Young Investigators' Award は若手研究者の活動を啓蒙するうえでも良いと思います。口頭発表やポスター発表の演題の中から、いくつかのトピックについて優秀なものをピックアップしてワークショップで発表させる(分子生物学会の方式)のも良いと思います。(40)
- ・ 国際化のためにも交通の便利が良いところで開催した方がよいのではないかと。(42)
- ・ 1. 医学部出身者のための学会というイメージを払拭すること。生命科学を研究するあらゆる研究者に広く開かれた学会であることを実質化するような学会運営を行うこと(例えば、教育委員会の取り組みなどは non-medical life science students も視野に入れて企画する)。 2. アジア地区の研究者が多数参加する学会大会とするための工夫を行うこと。(43)
- ・ 数年に1回ほど、他の学会と共同開催。(44)
- ・ 分野が広すぎる。殆どの人は、自分の分野以外を理解できていないと思う。わかりやすいプレゼンに努める。学会本部はこれに努める。(47)
- ・ もう一度臨時会員(半数)1年間、企業などとの共同が増えているので、政治改革の一環で産学共同という流れに今あるので、会員数減を食い止められる - 増加に転じる。 -- 財源に繋がる。(48)
- ・ 結局魅力あるシンポジウムの構成でしょうか。他学会からのシンポジウム提供も含めて、invite をしてはどうでしょうか。(51)
- ・ 年会費を下げる。(52)
- ・ young investigator award のようなものをいくつかの grade にわけて設ける(たとえば医学生や大学院生、卒後10年以内)。(53)
- ・ セッションをうまく組まないで分裂する(グループ化)のでは?(54)
- ・ 基礎研究者がほとんどの現状では、これ以上の活性化は難しいのでは?他の学会との協同で開く。臨

床医学に関わっている人々(医師、看護師、検査技師など)に参加しやすくしてはどうでしょう。土日の日程、発表を日本語でも OK として、参加者の自由に任せたら。又は、日本語でのセッションも有ればどうでしょう。(58)

- ・ もともといろいろな事に興味のある人は今のままでよいと思いますが、自分の専門外のことにも興味を持ちやすくするために、入門コースのようなセッションを作ってほしい気がします。(60)
- ・ 20 - 30 年前には大きな大学医学部の教授たちが学会運営の中枢を占め続けていた(少なくともそういう印象を与えていた)のに比べて、幹事の構成を見ても、そうでない人達を中心になっているし、医学以外の分野の人達がどんどん加わってきている。その動向をもっと強く受け止めて、その人達が自分の主たる活動の場として生理学会を考えられるような魅力を持たせるべきだろうか。医学部で正統の生理学を進んできたものとして、残念な思いがないわけではないが、コ・メディカル分野の広がり、理学系の人達の流入が現実である以上、これは当然の流れと考える。(61)
- ・ 純日本語での発表(カタカナを使わないのではなく)を 1 セクで取るとよいと思う。レフリーつきで標準語(関西弁、…弁ダメ)での発表に優秀者…。(62)
- ・ 若手がシンポジウムやグループディナー(?)を組織しやすくするような、積極的な働きかけが必要ではないかと思います。(67)
- ・ さまざまな分野の人々が、順番に主役になるように企画する。(68)
- ・ 一般市民や小学生高学年や、中学生、高校生等にも学会や大会の存在を知ってもらい、1 枚 3~5 人といったグループ参加で、大会の案内と紹介をする。もしくは枠を作る。生理オタクがマニアックに行うのではなく、我々の仕事をもっと社会に知ってもらうためにも、きちんとした管理下の元、知識、技術の共有を図りたい。(70)
- ・ いくつかの session に native speaker で顕著な生理学者を招いて discussion を盛んにする(Journal of Physiological Science の外国人 editor を招くのもよいかも知れません)。他学会との Joint Symp は継続する。(72)
- ・ 学会場の選定を慎重に行うべきだと思う。他県・他国からの交通網、学会場内での移動 etc を踏まえて決めた方がよいと思います。(73)
- ・ 特にアジア地域からの参加、発表を増やすことと関係する。報道関係により積極的に働きかけ、多くの記事を掲載してもら。研究成果を一般の人に分かり易く説明出来るような解説者の育成を、Nature などに発表された論文の意義などをよく広く報道してもら。(76)
- ・ 健康医学とのつながりが一般の人にわかるように市民シンポジウムを開催する。(77)
- ・ 子持ち・介護中など、時間的にきつい人でも参加しやすい工夫。(80)
- ・ 日本生理学会では、音声による discussion は、日本語で、活発に、正確に行ったほうが良いと考えます。1つの分野に対し、生理学的手法にこだわらずに、生化学、薬理学、物理学、数学そして臨床医学の手法を駆使(遺伝子、分子生物学はすでに取り入れられています)して、真理に迫るといのはいかがでしょうか。当番校がオーガナイズするシンポジウムを増やしたほうが、上記のことはやりやすいと思います。(81)
- ・ 活性化、発表とは学会としてどのように考えているのでしょうか？国際化することで本当に発展するのでしょうか？現在の大会の一番の目的が IUPS に向けて、英語での発表に慣れるということであるなら、このまま英語化に重点をおくということになるのでしょうか。全ての目的、利点を同じように維持し続けるのは難しいだろうので、大会の目的に優先順位をつけざるを得ないでしょう。(82)
- ・ 会員の情熱以外にない。学会を育てるという意識を万人が持つようにすること。(83)
- ・ 開催できる会場が限られていると思う。会場が遠い地方に住んでいる会員の交通費負担も大変ではないか。特に学生への交通費援助も一考に値するのでは？(86)
- ・ 日本語による討論で、大会に充実化を測り、まずは、国内における重要性をあげることが先決。若手 etc. にいい研究者が育てば、自然と外からも人は来るのでは？(89)
- ・ 同上(質問 8 に同じ)、大きくすること、国際化することが本当に良いかを考えてみるべき。むしろ国際化については、国際学会への参加を学会としてサポートする(若者だけでなくシニアも)などの方が、当人に

とっても勉強になるはず。(90)

- ・ 専門分野が細分化している以上、研究面で会員増を図るのは困難である。医学部教育におけるコアカリ、CBT など、教育面は必ず誰でも直面する問題であり、共通項目なので、「教育」に力を入れた内容を増やしたり、工夫をしている人に発表をしてもらおう。(96)
- ・ もっと学生を参加させ、若手育成を図る。(99)
- ・ 国内の底上げと国際的なレベルの向上を同時に行うことは不可能。目的は幅を広げることなのか、狭めることなのかははっきりすべき。活性化と発展ではわかりにくい。(100)